

戦姫絶唱シンフォギア
時空を超える歌

鮭猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の変哲もない、いつも通りの日常。それが壊れるのは、いつだって突然である。

突如として現れた新たな敵。それを追うようにして響たちの前に現れたのは——異世界からやってきた”時の旅人”。

彼女たちは再びギアを纏う。新たな邂逅の先に、彼女らを待っていたのは——

「作者コメント」

別作品「ポケットモンスター Re:Union」の投稿がひと段落したということで、前々からやってみたかったクロスオーバー作品を書いてみます。未来が神獣鏡を使っていますが、スマホゲーム「戦姫絶唱シンフォギアXD」のイベント「陰り裂く閃光」以降のストーリーだと思ってく読んで下さい。アナザーエデンの方は1・5部「オーガ戦役編」後という設定です。

いずれはこの作品のアナザーストーリーも書いていきたいです。何故だかこつちの方が多く読まれてるような気もしますがメインはあくまでポケモンの方です、ノデ。

※注：作者はシンフォギアをゲームでのみ履修しているため原作とは辻褄が合わない部分もあるかと思えます。その際はすぐに指摘してくださいと助かります。

(お知らせ)

第一部、完結しました！テスト明けに第二部の方の投稿もスタートしていく予定なので楽しみにしておいて下さい！

目次

第一編 時空を超えた邂逅

Chapter 1 | 迷い猫が導く

先は | 1

Chapter 2 | 現れし者の名

は： | 8

Chapter 3 | 時の影より来

たりし者 | 19

第二編 新たな敵 混沌と崩壊へのカウ

ントダウン

Chapter 4 | たとえ一度は

刃を交えようとも (前編) | 29

Chapter 5 | 信じる正義の

ために (前編) | 38

Chapter 6 | Chaoti

c Alchemy | 48

Chapter 7 | たとえ一度は

刃を交えようとも (後編) | 53

Chapter 8 | 信じる正義の

ために (後編) | 65

Chapter 9 | Lost A

lchemy | 80

Chapter 10 | まだ負けて

なんかいないッ!! | 88

第三章 反撃、そしてその先へ

Chapter 11 | 負けてばか

りの私たちじゃない――	103
Chapter 12 操るもの、	
操られるもの――	111
Chapter 13 顕現、闇の	
主――	137
Chapter Final 絆の	
剣と握った拳と、そして――	151

第一編 時空を超えた邂逅

Chapter 1 —迷い猫が導く先は—

「ふん、ふーん♪」

立花響は、近くの公園を散歩していた。ここ一週間の間、S.O.N.G.に呼び出された用事といえば、せいぜい迷子探しぐらいだ。ノイズも全く姿を見せていない。逆にこちらが警戒するほど、この世界は平和に満ち溢れていた。

そういうわけで、今日は何人かの装者と共に散歩に来ている、というわけだ。

「んー、たまには外に出るのもいいもんだな」

「日差しが気持ちいいデスッ!」

後ろで、雪音クリスと暁切歌が話している。響は、ここに未来もいたらしいのにと、思った。

小日向未来は、響の同居人であり、響の親友。彼女もまた、神獣鏡シエンショウジンの力を宿す装者である。

そして、なぜ彼女がいなかったかというと、珍しく補習に引っかかったのである。

「それにしても、このメンバーで散歩なんて、ちよつと珍しい光景だね!」

響が二人のほうを振り返って言う。響とクリスと切歌、こんなメンツで集まることなどほとんどない。と、

「みゃ〜お…。」

どこからか、猫の声が聞こえる。その声を聴いた響は、考える前に走っていた。そう、響は、超がつくほどのお節介なのである。

「あつ、おい、待ってって!」

「響さん、待つデス!」

2人の声には目もくれず、響は声のする方へと走っていった。だんだん鳴き声は近くなってきている。物の数秒と経たずして、響は声の主に辿り着いた。

そこには一匹の猫がいた。毛はぼさぼさだが首輪をつけているため、どうやら飼い猫のようだ。

「どうしたの? 飼い主さんとはぐれちゃった?」

「みゃ〜…。」

そういつて、その猫は響のほうへすり寄ってきた。その時、首輪のネームプレートが見えた。英語で書いてあったため上手く読めなかったが、そこにはこうかいてあった。

「ヴァル：： ヲ？」

それが、この猫の名前らしい。名前に反応したのだろう、その猫は嬉しそうに響にすり寄ってきた。

「：： つと、こんなところにいたのかよ」

「探したデスよ、響さん！」

クリスと切歌もやってきた。二人の心配をよそに、響が突然叫んだ。

「私、この子の飼い主を探してあげたい！」

「エエツ!? この子がどこから来たのかもわからないのに、デスか!？」

「まあ、いつものことだからな。アタシも付き合つてやるよ」

そうして、三人はヴァルヲという猫の飼い主探しを始めた。

まず街頭で聞き込みをしたものの、飼い主が現れないどころか、誰一人ヴァルヲという名前にピンとこなかった。

響たちの学校の校内放送でも呼び掛けてみたものの、飼い主は一人も来なかった。

そうしているうちに、すっかり日が傾いてしまった。

「あー、もう夕方かよ。こりゃあ今日はあきらめるしかないかなー」

「そろそろ帰らないと、調に心配されるデスッ！」

「そうだね：： また明日、探してみよつか！」

そういつて帰ろうとした時、ヴァルヲがこれまでになく激しい反応を見せた。
「うわあ……っ、急に暴れないでっば！」

ヴァルヲは響の手をすりと抜け出すと、茂みのほうへ走って行ってしまった。
「ああ……っ、待ってヴァルヲ！」

「おい……っ響！待ってっ！」

「もう調からのお尻ぺんぺんを覚悟しないとデス……」

一心にヴァルヲの後を追う響。そうして辿り着いたのは、学校の裏山だった。

「はあ……はあ……っヴァルヲ？どこ？」

「おい、もう暗くなるっつのに裏山に行く気か!？」

「駄目デスよ響さん！これ以上遅くなったら調に何と言われ……」

切歌の声はそこで途切れた。三人の目の前に、突然人影が現れたのだ。そして……

「あ、ヴァルヲ！もう、どこに行ってたの？」

出てきたのは、15歳くらいの一人の少女だった。

「えっと……あなたがヴァルヲの飼い主さん？」

「はい！私はフィーネといいます。よろしくお願いします！」

「フィーネ」という名前に、思わず顔を曇らせる三人。何を隠そう、かつてこの世界は、フィーネという名の女性によって壊されかけたことがあるのだ。

「…？皆さん、どうかされましたか？」

「ああ、いやいや、何でもないよ。ちよつと昔のことを思い出しちゃって」

「そうですか… それより、ヴァルヲを見つけてくださってありがとうございます。」

「礼なら、このお節介に行ってください」

「私たちは響さんについてきただけデスから！」

「そうでしたか！響さん、ありがとうございます。」

そういつて、フィーネは深く頭を下げた。

「ううん、これぐらいいいって。私はただ、迷子を届けてあげただけだから」

「いえ、ヴァルヲは私たちにとって大切な家族なので… それにしても響さん、私のお兄

ちゃんと同じぐらいお節介なんですな。ふふっ」

「へえ、どんなお兄ちゃんなの？」

その後、色々な話をした。フィーネの家族のこと、ヴァルヲのこと、響たちのこと…

シンフォギアのこととは一般人に知られては行けないので伏せておいたが。

「へえ、響さんたちはこの学校の生徒なんですな！」

「みんな学年は違うデスけどね！… って、もうこんな時間デスッ!？」

「やば、そろそろ帰らねえと！」

「未来、今頃心配してるだろうな……ごめんね、もう帰らないと」

「いえ、大丈夫です！それから、もし良ければもう一度私達と会っていただけませんか？
響さんたちのこと、もつと知りたいです！」

「もちろん！いつでも会いに行くよ！」

そういうと、ファイーネは満面の笑みを見せて喜んだ。

そして、響達とファイーネは別れた。

響が家に帰ると、未来が目を腫らして出迎えた。

「響……ッ！もう、心配したんだからね……」

「ごめん未来、ちよつと迷子の猫を届けててね！」

「もう……響らしい。くすっ」

未来にも、笑顔が戻る。

「ほら、もうご飯できたよ。ふらわーのおばちゃんに、お好み焼きの作り方を教えてもらったんだ！」

「おおー、美味しそう！いただきまーす！」

こうして、彼女たちの何気ない平和な一日は終わっていく。

その平和が、すぐに壊されてしまうことも知らずに…

Chapter 2 —現れし者の名は… —

ある日の昼下がり、響はトレーニングに励んでいた。

「ふっ！はあっ！」

響が最後の一体を倒すと、風鳴司令が手を叩きながら入ってきた。

「響くん、トレーニングは順調のようだね。ところで、何で急にトレーニングをしたい、だなんて言い出したんだい？」

「えへへ、いざというときのために、今から体を動かした方がいいと思ひまして」

「うむ、いい心がけだ。来るべき日に備えて——」

その時、サイレンが響いた。友里の声が響く。

「工業地帯で火災発生！原因は未だ不明！」

「——つと、今日がその日かもしれないな。響くん、様子を見に行つてきてくれ。くれぐれも無理はするなよ」

「はい、師匠ッ！」

工場が燃え盛っている中、その玄関口に響はたどり着いた。先に現場に到着した調と

切歌から、状況を聞いた。

「どうやら、幸いにも人が人はいないそうです」

「休日だということもあって、今日は出勤している人はいつもより少なかったそうデス」

「良かった、でもまだ人がいないか確認して——」

そう響が言いかけたとき、突然巨大な建物の一角から爆発音が轟いた。三人が振り返ると、そこには彼女らの見たことない物がいた。

見た目はノイズのようだが、ノイズのように多様な種がいるわけではなく、すべて青い体に赤い爪という奇怪な形状をしていた。こちらに向かってくる奴らから熱波が飛んできているのが分かる。おそらく、あの爆発の原因はこの謎の生命体だろう。

「良く分からない敵ーだけど!!」

「この場で奴らと戦えるのは、私たちだけ...」

「腹をくくるしかないデスッ！」

「Balwisyall Nescell gungnir tron...」

「Various shul shagana tron…」

「Zeios igalima raizen tron…」

三人が聖詠を唱え、その身体をシンフォギアで包む。間もなく、彼女達は戦いに臨んでいた。

「せいっ！はあああーっ！」

「デースッ！」

「これで…ッ！」

奴らは突然響たちに襲い掛かってきた。どうやら敵対視しているようだ。が、ただでやられるシンフォギア装者ではない。三人とも彼らと戦っているが——

「そんな、攻撃が効かないデース——うッ!？」

「これは一体…ッ!？」

自分たちの攻撃が一切当たらない——どこかで聞いた現象だ。響は必死に奴らの攻撃をよけながら普段はほとんど使うことのない頭をフル回転させた。やがて、彼女は一つの結論にたどり着いた。

「まさか——位相差障壁!？」

位相差障壁とは、自身の周りの空間を強制的に捻じ曲げることで外部からの干渉をほぼ0にする能力である。ノイズがそれを有しており、それに対抗できるのはシンフォギア装者だけである。が、これは彼女たちですらも手に負えないもののようなのだ。

「く…じゃあ、奴らに対抗するには、どうすれば…」

三人とも、すでに体力の限界が近づいてきていた。立っているのもやつとな状況、相手はこちらの攻撃が効かない、もはや万事休すか——

「まだあきらめちゃだめだ！」

突然、謎の声が聞こえた。三人が辺りを見回すと

奴らをなぎ倒しながら、一人の青年が近づいてくる。彼の手には、青色の刀身をした、禍々しい雰囲気のある剣が握られていた。

「そっだよ… 私たちがあきらめてどーすんだー！」

響が叫ぶ。その言葉に、調と切歌も士気を取り戻したようだ。とはいっても、やれることと言えば相手をけん制して青年の攻撃の補助をすることぐらいである。三人と青年は、再び戦いだした。

「はっ！やあっ！」

「せいっ！はあっ！」

響と青年は、初めてあつたとは思えないほど、見事な連携を見せていた。

彼らは前にも増して、うまく奴らと戦えるようになつていた。すると――

工場の方から、ひときわ大きな爆発が起きたかと思うと、その生命体をそっくりそのまま巨大化したような奴が飛び出してきた。どうやら、奴が親玉らしい。

「みて！あれを倒せば……」

「でも、あんな大きさ、聞いてないデスッ！」

「それでも、やるしかない……！」

「ああ、オレ達なら、きつと！」

その時、彼の持っている剣がかがやきだした。不思議がる三人。その青年が話し出した。

「オレの剣、オーガベインは、今なら相手の動きを止められる！そのうちに一気に決めるんだ！」

「分かった、じゃあすぐにでもッ！」

そして、その青年はオーガベインを高く掲げた。すると、彼を中心に、空間がゆがん

でいくのが分かる。その空間内にいる奴らは、ピクリとも動かない。

「よし、今のうちに一気に！」

「うん！調ちゃん、切歌ちゃん、いくよッ！」

三人は、不思議と力が湧いてくるのを感じてファントムノイズに攻撃を仕掛けてみた。するとどうだろう、なんと攻撃が当たるではないか。この空間上でなら、奴らに好き放題攻撃を浴びせられるようだ。彼女たちの怒涛の反撃が始まった。

それからしばらくして、小さいものはほとんど片付いた。しかし、まだ例の親玉は残っていた。

「——!? まずい、そろそろ動き出す！早く決めないと！」

「でも、あいつの体力は周りの小さいやつらとはけた違いなはず。： どうすれば。：」

青年が黙り込む。彼はちよつと考えた後、

「よし、オレ達の必殺技で決めよう！」

「うん、それならー」

「ーいけるかもデスッ！」

彼らは力を振り絞り、技を浴びせる。調と切歌が大技を打ち、その後には響と青年が一緒に技を浴びせる、という作戦だった。

「これで……っ！」

「喰らうのデースッ！」

2人が技を打ち、奴の腹が大きく抉れる。それを見計らったかのように、二人は技を打ち込んだ。

「限界なんて壁は、突破しますッ！」

「これで終わりだ！」

2人が技を繰り出したすぐ後に、空間のゆがみも消えた。そして、奴らの親玉らしき物は、がくりと膝をついたかとおもうと――

一点に向かって咆哮を上げると、再び立ち上がり、調と切歌を吹き飛ばした。

「うわあああーっ!!」

「きやあああーっ!!」

「調ちゃん、切歌ちゃん！」

2人を心配する響に、巨大な影が迫る。親玉は、響に向かってその手を振り下ろして「まだ、くたばらせるわけにはいかないッ!!」

——その拳は、青年とオーガベインが受け止めた。親玉は思わず後ずさりした。とそ
の時、青年のオーガベインと響のペンダントが、共鳴するようにかがやきだした。そして、なんと——再び、あの空間のゆがみが発生したのである。

「オーガベイン!? これは一体——」

すると、驚くべきことに剣が口をきいた。

「感じたのだ——我と、その娘の中にある力の共鳴を...!」

「何ツ!? それは、どういう——」

「アルド... 話す暇があれば、まずは目の前の敵を倒してからだろう。」

「そうだな...! 君、一緒に——」

「響、でいいよツ!」

剣にアルドと呼ばれたその青年はちよつと驚いたような顔をしたが、ふつと笑うと、

「分かった、響。さあ... 反撃開始だ!」

オーガベインと響のギア——ガングニールは、これまでになく輝いていた。

「これなら、今まで以上の技を出せる気がする... ツ!」

「ああ、オレも感じてるよ... これ以上ない共鳴を...!」

二人は、親玉に突っ込んでいった。アルドは剣を構え、響は拳を強く握って——

「最速で、最短で、まっすぐに、一直線に——ツ!」

「これで、けりをつける! はあああ—っ!」

二人は、同時に技を繰り出した。我流・巨魔劍斬——それは巨大な光の槍となって、目の前の敵を貫いた。

次の瞬間、空間のゆがみが消えた。二人が息を整えようとしていると、後ろで轟音が響いた。

2人が後ろを振り返ると、そこには巨大な青い幽霊のようなものの亡骸が横たわっていた。

「やった…のか？」

「そうだよ！私たち勝ったんだ…よ…」

そういうと、響は疲れてその場に膝から倒れてしまった。

響が目を覚ますと、そこはベッドの上だった。

(あれ…ここは、S・O・N・Gの医療室…？)

「あ、響！やつと起きた、大丈夫？」

「あ…未来…」

その場には未来もいた。前にも話したように、小日向未来は響の同居人だ。同時に、彼女のことを誰よりも想っている人でもある。

「もう、心配したんだからね響！無理は禁物だって司令にも言われてたのに…」

「ごめん未来、でも今回はほんとに大変だったんだから...」

「まったく、響らしいといつかかなんというか...」

未来が病室を出て行ったあと、響はもう2人、同じ空間にいるのに気づいた。

一人は病室で響と同じく寝込んでいるアルド（なんと甲冑を着たままベッドの中で眠っている）。そしてもう一人は――

「ふい... フィーネちゃん!？」

「あ、響さん！まさかこんな形でもう一度会うことになるなんて...」

そこにいたのはなんと、昨日学校の裏山で出会ったフィーネだった。響は驚いた。なんでフィーネがこんなところに...？

「響さん、私がここにいて理由が知りたいって顔をしていますね。ふふっ」

そういうと、フィーネは響のベッドに腰掛けて、こう言った。

「実は私、アルドお兄ちゃんの妹なんです」

Chapter 3 —時の影より来たりし者—

響は驚いた。なんと学校の裏山で出会った少女フィーネは、この前共に戦った、アルドという青年の妹だというのだ。

「えへへ、驚きましたか、響さん？」

「驚いたっていうか…… また会えてうれしいよ、フィーネちゃん！」

「はい！私ももう一度響さんと会えてうれしいです！」

そこに、クリスと切歌、調が入ってきた。

「響さん！心配したデスよ、もう三日は眠ったままだったデス！」

「ええつ、私そんなに寝てたの!？」

「未来さんも心配してましたよ。あ、フィーネちゃん」

「調ちゃん、切歌ちゃん、おはよう。よく眠れたかな？」

「うん、私も切ちゃんも、ぐっすり。」

「フィーネの作った料理、すごくおいしかったデス！」

「まったく、アタシ達はどうもあんたたちと縁が多いな……」

「でも、それはいい事デスッ！」

「そうそう、何でフィーネちゃんのお兄さんは戦ってたの？」

「はい、それはですね…。」

フィーネは自分のことを話した。昨晚教えてくれなかったことだ。

自分たちはこの世界の人間ではないこと、かつて自分たちの世界を無限の混沌カオスから救い出したこと、ギャラルホルンではなく、時空の裂け目という時空を移動できる穴でこの世界にやってきたこと…

「そうか、だからフィーネちゃんたちはあんな山奥にいたんだね」

「時空の裂け目を伝ってこの世界に来た時に、あの山の頂上だったので…。」

「なるほどな、どうりで裏山のとっぺんには悪魔の穴がある、なんて噂が広まるわけだ」
「ええっ、クリスちゃん、そんな噂知らないよ〜」

「お前のクラスではそんな噂はなかったのか？まあいいや、それよりー」

その時、風鳴司令が入ってきた。足元には、ヴァルヲもいる。

「響くん、体調はどうだい？」

「あつ、師匠！おかげさまでだいぶ疲れも取れました！」

「そうか、それは良かった。ところで…フィーネ君、といったな。この前現れた謎の敵

について、何か知っていることがあれば教えて欲しい。」

「はい、分かりました。」

フィーネはちよつと咳払いをした後、話し始めた。

「あれはファントムダストという、私たちの世界の敵です。ファントムという、時の影からくる生命体を中心に発生しているようなので、おそらくこの世界にもファントムがいると思います。」

「なるほど……協力ありがとう、フィーネ君。」

そういうと、風鳴司令は部屋を出て行った。

「ファントムダストはこの世界にいないはずの存在……すみません、私たちの世界のことなのに……」

「ほかの世界から来た敵なんて、もう何度も戦ってきた。お前が謝る必要なんてねーよ」

「クリスちゃんの言うとおりだよ！ 私たちなら、絶対ファントムを倒せるって！」

「私たちがついていければ、百人力デス！」

「みんなで力を合わせれば、きつと大丈夫だよ」

「みなさん……ありがとうございます、こんな私たちのために」

フィーネは感激して、満面の笑みを見せた。と、

「フィーネ殿が申していたのはこの場所でございますか？」

「そのようね。在りし日の工業都市を思い出すわ」

「フィーネさんノ反応、この先のようデス。」

「誰かいるみたいだけど…？まあいいわ、入りましょうか」

「フン…誰だか知らんが、良からぬことを企む連中なら俺はすぐにでもこの剣を抜くぞ」

響たちの耳に聞きなれない声が聞こえたかと思うと、病室のドアが勢いよく開いた。そこから入ってきたのは、刀を腰に提げたカエル、紫色基調のロボット、ピンク色の髪の毛のようなものが目立つロボット、赤い服を着た、アルドと同じ年ぐらいの女性、そして不思議な形の剣を持った、青い肌の男性(?)だった。

「ん…?」

両者、一瞬の沈黙。そして…

「ええええええーッ、カエルが刀を持つてるデス!?!」

「おおおー、画面越しでしか見たことのないロボットだー!」

「おわっ!?!フィーネ殿が襲われているでござるか!?!」

「サイラス、落ち着いて!別にそうではないみたいよ!」

四人(二人と一匹と一体)は、病室の一角でさわぎだした。その騒ぎでアルドも起き

てしまったらしく、皆に不機嫌そうな顔を見せた。それらを横目で見ていたクリスは、ふとその輪には参加していない三人（二人と一体）を見かけ、彼女たちと話すことにした。

「なあ、この変な集団はあんたたちの仲間なのか？」

「ええ、そうよ。外見は変だけど、私も含めてみんなアルドの仲間だわ。ところであなたは…？」

「アタシは雪音クリス。あのバカ達と一緒に戦ってる、シンフォギア装者だ」

「ナルホド、アナタたちがシンフォギア装者なのですネ。こここの指令サンから伺いマシター」

「すまないな、こいつらが騒がしくして…後で俺がこの剣で喝を入れておくか」

「いや、それは流石にマズイだろ…」

そのうちに、響たちも収まったようだ。それを見計らって、クリスと言う。

「じゃあ、みんな自己紹介してくれないか？ほら、アタシ達もやるから」

そうして、この人数では狭すぎるであろう病室の中で、一人ひとり自己紹介が行われた。

「拙者はサイラス。気ままな放浪者でござるよ。わけあって今はカエルの身でござる。」
「KMS社製汎用ヘルパー・アンドロイド、リイカ デス。家事から戦闘マデ何でもお任せデス、ノデー！」

「私はヘレナ。人間と合成人間…。ロボットといった方がいいかしら？人間とロボットが共存する道を探しているわ。」

「私はエイミ。ハンターをやってるわ。料理は得意じゃないから頼まないでね…。？」

「俺はギルドナ。俺は人間ではない、魔獣族の王だ。一時はアルドたちと対立したこともあったがな…。」

「よし、そっちは終わったみたいだな。んじやあ、アタシたちいくか！」

「立花響です！食えることが好きで、あと困ってる人を見かけたら放っておけないかな」

「雪音クリスだ。んーと、この中では一応最年長。元々はアタシはこのバカとは対立関係にあったんだけど、今は大事な仲間だな！」

「暁切歌デス！」

「月読調です。」

両者、自己紹介が終わる。少し談笑した後、風鳴司令によって響たちは指令室に集め

られた。アルド達にはノイズの情報も伝えられた後に、例の謎の生命体について話が進められた。

「——これでノイズの基本情報は以上だ。次に、皆も知っているかと思うが、先の工場火災の最中、この世界にはいなかった謎の生命体が出現した。フィーネ君によると、その生命体の名前はファントムダストという——間違いないかな？」

「はい、あつてます。」

「よし、話を続けよう。現在翼とマリアはアメリカの方でツアー中と聞いた。今はないが、じきに二人もこちらに来るそうだ。」

「おお、マリアが帰ってくるデスか！ 久々に顔が見れるデス！」

「そして、その二人が到着次第、君たちはシンフォギア装者とフィーネ君達とで、二人一組になって行動してもらおう。シンフォギアによる攻撃が当たらなかつたことなど、ファントムダストのことは我々もよく知らないから、彼らの協力も必要というわけだ。そして、今ここにいる五人の装者には、行動を共にするものを決めてもらおうぞ」

長い協議の末、組が決まった。響とアルド、未来とフィーネ、クリスとヘレナ、調とリイカ、切歌とギルドナだ。エイミとサイラスは、翼、マリアの二人のうちどちらかと一緒にいる、ということだ。

「よし、これで全員決まったな。それじゃあ今日はこれで——」

その時、サイレンが鳴った。友里が叫ぶ。

「住宅街でノイズ及びファントムダスト発生！」

さらに、緒川と藤堯の声も聞こえた。

「都心部で突如ビル倒壊、そこからファントムダスト出現！」

「工業地帯で再び爆発、火災です！」

司令は、少し舌打ちして、全員に言った。

「むう……こんな時にすまないな、君たち。クリス君、調君、切歌君、現場に急行してくれ。」

「それじゃあ、私もッ！」

「ダメだ、響くん。君は万が一のために、ここに残ってほしい。ほかの場所と同じようなことが起こったら、動けるのは君と未来くんだけだ。それに、まだ君は体調が万全では

ないだろう?」

「そうですね…。分かりましたツ!!」

「拙者はいつでも助太刀に行けるでござるよ、司令殿。」

「私も行けるわ!」

「君たちは翼君とマリア君がこちらに到着するのを待つてくれ。万が一ノイズが発生した場合、君たちだけでは太刀打ちできないだろう。」

「むう…。承知でござるよ。」

「私たちの攻撃がノイズに当たるわけでもない限りは、さすがに動けないわね…。」

そして、三人はそれぞれの場所へと向かう。響が声援を送った。

「みんな、絶対帰ってきてね!」

「つたりめーだよ」

「もちろん、切ちゃんと一緒に帰ってくる。」

「こんなところで死ぬわけないデス!」

「じゃあ、行きましようか。」

「私たちナラ、ノイズもファントムダストも一捻りデス、ノデー!」

「ノイズだろうがファントムだろうが、俺に楯突くならすべて斬り捨ててやる!」

六人が見えなくなるまで、響はずっと「頑張つてー！」と言いながら手を振っていた。

第二編 新たな敵 混沌と崩壊へのカウントダウン

Chapter 4 一たとえ一度は刃を交えようとも

（前編） —

クリスとヘレナは、ノイズとファントムダストが同時に出現したという、リディアン近辺の住宅街に向かっていた。二人は道すがら、こんなことを話していた。

「……へえ、貴方も一時は司令と対立したこともあったのね。」

「アタシは幼いころにパパとママを無くして、それからほとんど一人で生きてきた。ほかのやつらを信じることなんてその時はできなかったけど、あのバカがアタシとS.O.N.G. を繋げてくれたんだよな」

「実は私も、最初からアルドたちと協力関係にあった訳じゃないのよ」

「へえ、じゃあアンタとアタシは同じような境遇にあったつてわけだ」

少しきこちない会話だが、クリスは自分と同じような過去を持つ仲間がいてうれしいと思つた。

2人が住宅街にたどり着く前から、すでに騒ぎは聞こえていた。急いで現場へ向かう

と、そこには文字通り「混沌」^{カオス}が広がっていた。

パトカーや救急車のサイレンがあたりに鳴り響き、建物の倒壊も見えた。そして、この住宅地の至る所にノイズ、ファントムダストは広がっていた。

「こりややべえな、さつさと片付けないと!」

「私はいつでもいけるわ。構えて!」

「Killiter Ichaiival tron...」

クリスは聖詠を唱え、その体にシンフォギア「イチイバル」を装着する。

「さあ、行くぞ!」

「ええ、必ず生きて帰りましょう!」

2人は互いの無事を誓い合った後、住宅地に突入した。たちまち、大量のノイズとファントムダストが襲い掛かった。

「ノイズはアタシに任せな、アンタはダストを!」

「分かったわ!」

ノイズへの攻撃は、通常は当たらない。位相差障壁とかいうやつので、外部からの干渉力をほぼ0にしているのだ。だが――

「さあ、たつぷり浴びせてやらあ！」

クリスの放った弾丸がノイズに命中し、そのまま消えていく。シンフォギア装者であれば、ノイズの位相差障壁を無効化し、攻撃を当てることができる。実体がないものに無理やり実体を付けるようなものだ。

しかし、新たな敵に直面したときは、情報を集めなければ話にならない。もともとシンフォギアは対ノイズ用に作られたものであり、これがほかの敵に効くのかどうか、不明な点も多い。そして今回は、それをアルドたちにカバーしてもらおうという戦い方だ。

「喰らいなさい！」

「そらよー！」

2人は順調にノイズとファントムダストを倒していく。住民の避難も終わったようであり、周りからサイレンの音は聞こえなくなった。

（いける…。このまま押し切ってやる！）

クリスが勝ちを確信したその時――

大きな音を立ててビルが倒壊した。そして、その中からやってきたのは――

「ーッ!?なんだ、あれ……バカでかいファントムダストか!?!あんなの、この建物のどこに隠してたんだよ!」

「気を付けて。大型のノイズも複数出現しているみたいよ。」

「だけど、たかだかちよつと強いのが3，4匹出てきただけだ、さっさと終わらせるぞ!」
「ええ、分かっているわ!」

2人は、そのビルの方へと向かっていく。その後ろ姿を、陰からじつと見ているものがあった。

「こりゃあ、すげえ……」

クリスが思わず声を漏らす。遠くから見てもそれは大型ノイズ及び大型ファントムダストであることは把握していたのだが、近くまで行くと、その大きさは二人の予想よりもはるかに大きいことが分かった。

「…これは、”ダスト”^{ホコリ}ではないわよね…」

「もうただのデカブツじゃねえか！」

「まあいいわ、あれは私に任せて。アナタはノイズを。」

「いわれなくてもわかってるっての！」

クリスは即座に言い返すと、ノイズの方を見た。

「よし、どこからでもかかってこい！」

そういつて、クリスは大型ノイズに向かって突進していった。

「彼女も頑張ってるものね…さて、私も本気を出さないとい！」

彼女は、ガリアードという名のパートナー機のことを考えていた。彼の顔を思い浮かべると、彼女はいつも胸の奥から力が湧いてくるような気がした。

ヘレナは大きく深呼吸をすると、巨大なファントムダストに向かっていった。

「これで… ツ！」

クリスが、最後の大型ノイズを倒しきる。彼女はふう、と息をつく、ヘレナの方へと向かっていった。

「そつちはどうだ？」

「ええ、今片付いたところよ。少し手間取ったけど」

2人が互いの健闘を称えあっていると、突然――

「―ッ！おい、なんだあれ…？」

「あれはまさか… 時空の裂け目!？」

突然切り裂くような音を聞き、二人が空を見上げると、そこには不気味に青く光る穴が浮かんでいた。2人が呆然とする間もなく、その穴から何かが飛び出してきた。

「おい、なんだあの黄色い陽炎みたいなやつは？」

「あれはまさか… ファントム!？」

ヘレナは青ざめた。自分たちと共にファントムダストがこの地に乗り込んできた以上、ファントムが来る可能性も0ではない。しかし、よもや本当に現れてしまうとは…

「ファントム… ってことは、あいつがこのダストを取りまとめる親玉なのか？」

「そうね、あれがあと何体もいると思うてくれればいいかしら。」

「はあ、あいつがもつといるってことか!？こりゃあ、ヤバい相手みたいだな…。」

すると、唐突にファントムが口を開いた。

「ご名答… 我らは次元の渦より出でしもの。すでにお前たちの世界は混沌から解放され、時の暗闇も消え去った… だが、ここにはノイズという奴らがいるそうではないか。」

「ああ、だけどソロモンの杖もバビロニアの宝物庫も閉じて、ノイズは消滅したはずじゃ——」

「その通りだ、しかしそれは“この世界”でのこと… 我らの力を使えば、過去からノイズを連れてくるのも可能だろう？」

「何ですって!? まさかあなたたちは、時を越えてノイズを——!?」

「そうとも、そして——」

そう言いながら、ファントムは何かを取り出した。それは——

「——ツ!! まさか、ソロモンの杖!?!」

「フ、今更気づいたところで… さて、我らは準備を進めなければなるまい… さらに、時の迷い子と装者たちよ。残された少しの刻を、せいぜい楽しんでるがいい。」

「おい、待ちやがれツ!」

「深追いしても無駄よ、奴らはきつと、時空の裂け目の向こう側だわ。それに…」

2人が振り返ると、そこには大量のノイズとファントムダストが出現していた。

「まずはこいつらを仕留めないと、つてことか」

「そうね、すぐに片づけてファントムの動向を探らないと…！」

「そうと決まれば、まとめて一気に片付けてやるッ！」

その叫びと共に、クリスが大量の銃弾を撃ち込む。それにより、大半のノイズは消滅した。だが――

「嘘だろ…なんでアタシの攻撃がダストには効いてねえんだ!？」

「私たちの攻撃がノイズに当たらないのと同じなのかしら…！」

ちょうどその時、S・O・N・Gから通信が入った。

「クリス君、ヘレナ君！聞こえるか？」

「ああ、ぼっちり聞こえてるぜ、おっさん」

「急に通信だなんて、何か伝え忘れたことでもあったの?」

「いいや、たった今判明したところだ。響くんたちが戦っているときのデータを調べているときにもしや、と思っていたことなのだが――あらかじめ、調君と切歌君には伝えてある。」

「もつたいぶらねえで早く言ってくれ！何が判明したつてんだ!？」

風鳴司令は、少し重いため息をついたかと思うと、こう続けた。

「奴らも――ファントムダストも、ノイズと同じように位相差障壁に似たものがあるこ

と
が
分
か
つ
た
」

Chapter 5 — 信じる正義のために（前編） —

調とリイカは、工業地帯へと向かっていた。

「へえ、リイカさんはヘルパー用アンドロイドなのね」

「ハイ、私はKMS社製汎用アンドロイド、デス！」

そう言つて、リイカは髪部分のパーツをグルグル回す。調は、それを見るのが面白いようだ。

「因みに調サンは、如何にしてS・O・N・G.に？」

「私？えつと…」

調は今までの自分のことを話した。リイカはそれを興味深く聞いていた。

「ナルホド、元々は調サンはS・O・N・G.と対立関係にあつたのですネ。」

「そう、私は最初、響さんの言う正義を信じてなかつた。今ではそれを申し訳なく思つているけど…」

「響サンと一緒に戦っているナラ、そう思う必要はないのでは？」

「え…？」

「響サンと調サンは今互いヲ信じあう仲間同士… きっともう響サンの中で勝手に解

決していると思いません。」

「リイカさん：．．． ありがとう、ちよつと気が楽になったかも」

「ワタシは心も癒す、ヘルパーアンドロイドです、ノデー！」

そして、2人は目的地に着く。そこでは、火災が発生しており、先の爆発で崩れた施設を、さらに炎が包んでいた。

「同じ場所で二度もこんなことが起こるなんて：．．． 一体何が？」

「辺り一帯を解析中：．．． 解析完了。調サン、どうやらこの爆発は、あの施設を中心二起こっていると推測されマス。」

そう言つてリイカが指さしたのは、ひときわ高く火柱が上がっている施設だった。

「あれつて確か、前にウエル博士がソロモンの杖を研究してた：．．．」

「あの場所が怪しいデス。行きますショウ、調サン！」

2人が爆発した場所と思われる施設に入ると、そこには謎の文字で書かれた研究資料が多数散らばっていた。

「何だろう、この文字：．．．」

「解析中：．．． この文字はどうやら、古代メソポタミア文明の楔形文字だと思われマス。」

「メソポタミア文明：．．． !?何でそんな文字を使つて！」

「その理由を知りたかったら、私を追ってこい。」

不意に、謎の声が響く。2人が見上げると、そこにいたのは――

「ー!?なんで、あなたがここにー」

「僕が英雄になるためならどこへだって行く!それがこの僕、ドクター・ウエル!」

調は、自分の目を疑った。ウエル博士は数年前、魔法少女事変の時に命を散らしていたはずである。

「嘘……あなたはもう……」

「そうとも、死んでいるだろうね。」この時代”の僕は」

「この時代の……まさか!」

「想像の通りだ。僕は過去からやってきたのだよー得体のしれぬ陽炎に誘われてなーそんなことより、だ。君たち、この文書の秘密を知りたくはないのかね!?知りたいのなら私についてこい!はっはっはっはっはー!」

そう言い残すと、ウエル博士は廊下の突き当りの研究室へと、一直線に向かっていった。

「なんで、わざわざ過去からやってきたんだか……おめでたい人……」

「調サン、あの人は私タチヲあの研究室ニおびき寄せている可能性が高いデス。あの男ハ放っておいた方が安全だと思います、ノデ。」

「でも、そのまま放っておいて死んじやったら、新型LINKERが作れなくなる… やっぱり放ってはおけない…！」

「あつ、調サン！」

リイカが止めるのを聞かず、調はウエル博士のもとへと走った。それもそのはず、調たちが今こうして自由にシンフォギアを使っているのは、ウエル博士の協力によつて新型LINKERを作り出し、ギアの出力を上げること成功したおかげだ。今ここでウエル博士が死んだら、勿論LINKERは作れないことになり、調や切歌、マリアは、シンフォギアを纏うことさえ難しくなる。

「ウエル博士… あなたを今、ここで死なせるわけにはいかない！」

調は研究室のドアを勢いよく開け、その中へと急いだ。リイカも、遅れて研究室の中に入っていく。

「ウエル博士！ 私は来たわよ、さああの文書の秘密を話して！」

「良かろう… さあ、これを見るがいい。」

その声がそういうと、研究所のモニターに遺跡らしきものが映し出された。

その声はウエル博士のものではなかった。彼よりも低く、沈み込むような声だった。

「あなたはウエル博士ではない… 彼はどこへ？」

「ウエル博士… 彼はここにはいない。」

「え…？じゃあ、私が見ていたのは？過去のウエル博士はどこに!？」

不意に、研究所の奥から緑色の焰のように揺らめく生命体が現れた。

「これは…！調サン、あれがフアントム…時の影より来たりし者、デス！」

「あれは我々が作り出した、影ではない…ウエル博士はどうやら、自分の死後の世界には興味がないらしくてね…だから彼を、生前の世界、メソポタミアへ送ってやった訳だ」

フアントムが言うと、モニターの一部が拡大された。そこにいたのは紛れもない、ウエル博士だった。

「…ッ！なんてことを…」

「全く、我々におとなしく従っていればこうならずに済んだものを…まあいい、話を戻そう。ウエルをその時代に飛ばした時だ。妙な噂が耳に入った。この遺跡の地下深くで、とある兵器が作られていると…」

「メソポタミアの、古代兵器…!?それは、一体…」

フアントムは蔑むように笑うと、こう告げた。

「人工的に、ソロモンの杖を作ろうとしていたのだよ。」

「な…っ!？」

「量産し、ノイズを兵器として用いる。この上ない戦力となっていただろうな。だが結

局、ソロモンの杖は作れなかった。しかし、その研究成果を我々はこの時代に持ち運び、研究した。ここで幾度となく爆発があったのはそのせいだ。そしてついに、我々はその実用化にこぎつけたのだよ。…」

フアントムが静かに右手を上げる。その腕にはしつかりと、ソロモンの杖が握られていた。

「ーッ!!」

「さて、君たちがそれを知った以上、生かしてはおけないな。…残念だが、ここが君たちの死に場所だよ。」

フアントムがソロモンの杖を掲げる。すると、不意に地響きが起こった。どうやらノイズは研究室の外で発生しているらしい。

「ーいけない、あのまま放っておいたらー!?!」

「おっと、そう簡単に外へ出させると思ったか?」

その言葉と共に、研究室の奥からフアントムダストが現れた。

「さて、また会うことがあれば、その時はこの世ではないかもしれないね。…それでは、せいぜい抗ってくれたまえ。フフ。…」

不気味に笑うと、フアントムはどこかへ姿を消した。

「くっ…。まずは、こいつらから。…」

しかし、ファントムダストにはノイズと同じく位相差障壁があり、調の攻撃が当たらないことは、ここに来る途中で司令から伝えられた。

「調サン、ここは私に任せて外のノイズをお願いします！」

「でも、リイカさんが一人に…」

「大丈夫です。私は戦闘もできる、ヘルパー・アンドロイドです、ノデー！」

そういつて、リイカはハンマーを構える。白基調のボディーに、ところどころピンク色のカラーリングが施されている。

「分かった、リイカさん。必ず、私のところに戻ってきて」

「敵を殲滅次第、すぐに戻ります、ノデー！」

その答えに調は微笑むと、研究室を出て外に急いだ。

「ソレデハ：：コンバット・モード起動。制圧させていただきます。」

調が外に出ると、外ではノイズが発生、近くの作業員を襲っていた。

「いけない…！私が、行かないと！」

調は現場へ向かい、聖詠を唱える。

「Various shul shagana tron…」

調は“シウルシャガナ”を纏い、作業員に迫るノイズを片っ端から散らしていった。

「えい！ハイ！」

研究室では、リイカが必死に戦っていた。彼女の持つ槌―テラパワーハンマーは、彼女しか扱えない代物である。リイカはこのハンマーを手にすることで自身のメモリを拡張し、戦力の強化ができる。

しかし、止めどなくやってくるダストに、リイカは疲弊を感じていた。

「このまま数で押し切られてハ、さすがの私も負けてしまいマス…その前に―」

リイカの特徴は、戦闘中に自身の出力を三段階に調節できること。利点としては、最初から本気でないので、長期戦に持ち込まれても無理なく戦え、いざというときには一気に出力を上げて対象を殲滅できることだ。いわば自転車のギアのようなものだろうか。それはともかく、現段階―第一段階はコンバットモード。そして、第二段階は―「ターミネート・モード起動。」

リイカはテラパワーハンマーを持ち直すと、再びダストの群れに突進していった。

「はッ！これで―ッ！」

調が最後のノイズを倒しきる。ふう、と一息つくくと、作業員の方を見た。突然現れたノイズにまだ腰が抜けて動けないようだったが、炭素分解は見られなかった。

「あなたたち、動ける？」

「いや……腰をやったみたいでうまく立てなくて……」

「そう……分かったわ」

調はそう言うのと、S. O. N. G. に救助要請を頼む。数分後、友里が駆けつけて彼らを病院へと運んでいった。

(さて……リイカさんは大丈夫かな……?)

調が研究室に戻ろうとしたその時、轟音が響き、ファントムダストの残骸が飛び散った。そして――

「調サン、こちらは片付きマシタ。」

「リイカさん……無事だったんだね、良かった……」

2人が互いの無事を称えあっている、不意に、

「おやおや……これは困ったな、まさか二人とも生き残るとは……」

二人の前にファントムが現れた。

「私たちを見くびらないでほしい。」

「ワタシと調サンなら100人力デス！」

「フン、威勢だけはいいようだな……だが、さすがに時の流れには逆らえまい？」

「……? いったい、何のことを――」

フアントムはソロモンの杖を、空を切るように突き刺した。

「ならば教えてやろうーお前たちも、あのバカと共に送つてやるのだよ。せいぜいそこで、余生を満喫するがいい…！」

すると、フアントムが突き刺したところに青い光が現れた。

「いけません、時空の裂け目デス！これ二吸い込まれたらー!？」

「うう…ッ、ダメ、吸い込まれる…!？」

二人は抵抗する間もなく、時空の裂け目の向こう側へと飛ばされてしまった。

一方、S. O. N. G. では…

「…!？シウルシャガナとリイカさん、反応消失！」

「何だつて!？リイカ!!」

「嘘…調ちゃん…!？」

Chapter 6 — Chaotic Alchem

y—

切歌とギルドナは、通報があつた都心部へと向かつていた。先程司令から連絡があり、ノイズと同様フアントムダストにも位相差障壁があることを聞いたため、二人は作戦を練りながら向かつていた。

「要するに、俺がフアントムを狙い、お前がノイズを狙うということか——それって作戦になつてるのか？」

「いいのデス！何も考えないよりましデスよッ！」

2人の作戦とは実に簡単だった。ギルドナはフアントムダストを、切歌はノイズを攻撃し、どちらかが危険な状態になったら陽動などで援護する——簡単すぎて、もはや作戦でも何でもないかもしれない。

それはともかく、歩いていた二人の前にビル街が見えてきた。

「あれに人間が住んでいるのか？崩れてしまわないか心配になるが——むっ!!」

ギルドナの目線の先には、倒壊したビルがあつた。

「何だか嫌な予感がするデス……」

「そうだな——とにかく行ってみないことには何も分からん。遅れるなよ。」

「エッ？あ、待つデス！」

2人は急ぎ足で、瓦礫と化したビルに向かった。到着してはじめて、その被害がどれほど甚大であるかが分かった。倒壊したビルの破片が道路の方にも転がり、交通渋滞を生み出していた。他にも破片が飛び散ったり、鉄骨がむき出しになっていたりして、まともに歩くには危険すぎる場所になっていた。

「ん？あれは……」

切歌は、ビルのエントランスにかかっていたものらしき看板を見つけた。そこには「特別展示：Ancient Alchemy —古の錬金術展—」と書かれていた。

「デアデアース！ギルドナさん、これを見るデスッ！」

「どうした、そんなに慌てて……」

切歌は看板をギルドナに見せた。彼は少し考えた後、こう呟いた。

「錬金術の応用か……」

「え？」

「ファントムがこのビルを襲撃した理由は、恐らく錬金術を我が物として、さらなる兵器の開発でもするつもりなんだろう。」

「そんなことをやってるデスか!？」

「あくまで推測だから本当かどうかは分からん——だが、俺の前に立ちふさがるとしたら、どんな奴だろうと斬り捨ててやる！」

ギルドナは拳を固く握った。切歌がそれを見てると、

突然のことだった。中央の瓦礫が爆ぜ、中から何かが飛び出した。

「危ないッ!!」

ギルドナが突然切歌を抱きかかえて飛び出した。呆気にとられた切歌がさつき自分たちがいた場所を見ると、吹き飛んだ瓦礫が突き刺さっていた。

「あ、ありがとうデスッ！」

「礼には及ばん。俺は仲間として当たり前のことをしたまだけだ。」

「うう、相変わらず素直じゃないデス……」

2人が話している間に、爆風による土煙は収まったようだ。2人が見上げると、そこにはフアントムが浮かんでいた。

「やはり貴様だったか、フアントム——さしずめ、錬金術の知識を奪おうという算段だな？」

「フツ、その通りだギルドナ……さすがは魔獣の王、と言ったところかな？」

「御託はいい。さっさと奪った資料を返さないと、俺の剣が火を噴くぞ」

「まったく…そう言われてやすやすと返すと思っただかい？」

フアントムが右手を上げると、そこには――

「デデデデースッ！何でソロモンの杖がこの世界に残ってるデスか!？」

「フツ…そうだな、確かにソロモンの杖は消え去ったーだが、我々は古代メソポタミアで未完成となっていたソロモンの杖とそのデータをもとに、新たにソロモンの杖を作り上げたのだよ…!」

フアントムが左手を上げた。彼が持っているものを見、2人は目を疑った――

ソロモンの杖が、もう一つ…？

フアントムは話を続ける。

「さらに、我々は次元粒子を組み込み量産に成功したのだ…」

「次元粒子——って何デス!？」

「差し詰め、時空が歪んだ際に発生する未知の粒子、と言ったところか。それを組み込んで何をする気だ、お前たちは？」

「フツ、いずれわかる日が来るさ魔獣王…我々の望んだ世界は、もうそこまで来ているといつても過言ではないのだよ…ククク…ハハハハツ…!」

ファントムは不気味な笑い声を上げながら消えていった。

「あつ!!逃げるなんて卑怯デスッ!」

「それよりも今は、こちらが優先だろう!!」

いつの間にか、二人の周りを大量のノイズとファントムダストが囲んでいた。

「ああもう、やるしかないデスッ!!ギルドナさん、背中は任せたデスッ!!」

「いいだろう。お前の背中、俺が請け負った!」

切歌とギルドナは背中合わせの状態でファントムダスト、ノイズと対峙した。切歌が聖詠を唱える。

「Zeios igallima raizen tron:」

緑色のギアに身を包み、彼女は緑色の鎌を取り出した。ギルドナも剣を抜いた。

「さあ準備はいいかファントムども!一体ずつくたばらせてやる——震えて待つがいい!」

「全力全開1000%デスッ!!」

2人は、ノイズとファントムダストの群れに突撃していった。

Chapter 7 一たとえ一度は刃を交えようとも

（後編） —

「——てことは、アタシの攻撃はダストには効かないってことか！」

「そういうことだ、クリス君。君には引き続きノイズの殲滅と、発生源の特定を急いでほしい。」

「言われなくても、やってやらあ！」

クリスはノイズがどこからやってきているかを探ろうと、辺りを見回す。どうやら、ノイズは住宅街から離れたところからやってきているようだ。その方角には、今は使われていない古ビルがあった。

「発生源の場所さえ分かれば、あとはそこを叩くだけ！」

クリスは辺りのノイズを爆破すると、すぐにビルへと向かっていった。

一方ヘレナは、止めどなくやってくるファントムダストに苛立ちを感じていた。

「まったく、発生源さえ分かればいいのだけど！」

ヘレナは自分の周りにいるダストを一斉に倒すと、辺りの索敵を行った。

「索敵完了——どうやら、あのビルが発生源ね。」

ヘレナは満足したように微笑むと、道中のダストを倒しつつそのビルへと飛んでいった。

発生源と思われるビルの前で、二人は再会する。

「あら、その様子だとノイズの発生源もここみたいだね。」

「その言い方は、きつとダストもここから湧いてんだな。よし、行くぞー！」

二人はそのビルを一階ずつ、念入りに調べた。だが、だれかが侵入したり、ノイズやフアントムダストが発生した痕跡もない。

「何も無いわ……ここじゃないということなのかしら？」

最上階から一回へと戻るビルの中でヘレナが言った。

「しようがないわね。ここはいったん諦めて——」

「いいや、地上にないのなら——」

突然クリスが口を開く。ヘレナが驚いて呆然とする中、クリスは何を思ったか、小型の銃を取り出して、

「——地下だ！」

クリスはエレベーターの壁を撃った。ヘレナが呆れたように言う。

「いったい何のつもりかしら？ そんなところを撃つても——」

そこまで言つて、ヘレナは喋るのをやめた。クリスが撃つた場所からは、妙なデザインのボタンが出てきた。

「これは——何でこれが分かったの!？」

「逆に聞くぞ。悪い奴らの秘密基地は、こんな風に住宅地に堂々と建ててあるものなのか?」

ヘレナは納得した。隠したいものを、目立つように置いてあるはずがない。

「それじゃあ、行くぞ!」

「えっ? ちよつと、まだ心の準備が——」

ヘレナが言い終わる前に、クリスが謎のボタンを押した。瞬間、エレベーターは急加速し、地下深くへと潜つていった。

しばらくして、二人はふらつきながらエレベーターから出てきた。

「つたく、何であんなに早くなつたんだ…」

「あなたが急にボタンを押したせいで心の準備ができてなかつたじゃない…」

愚痴を吐きつつも、二人は研究施設らしき建物の中を進んでいく。少し進むと目にとまったのは、大型カプセルのようなものだった。何をしているのだろうか?

2人が疑問を持ちつつ先に進むようになった瞬間、不意にファントムが現れた。

「おやおや、これほど早くこの場所がばれてしまうとは…」

「ここであつたが100年目だ、ファントム！何をしようとしてるのか知らないが、アタシの目が黒いうちは好きにはさせねえ！」

いきなり、クリスが仕掛ける。だが、彼女の放つたミサイルはファントムをすり抜け、向こう側の壁に激突した。

「畜生…位相差障壁か！」

クリスが舌打ちをする。ファントムはその様子が気に入ったかのように笑った。

「フ…君の攻撃は、そんなに生ぬるいものなのかね？」

「だったら、私がやればいい！」

今度はヘレナが、ファントムに向けてミサイルを撃つた。それは命中したかに見えたが、時空の裂け目に飲まれて消えていった。

「うっ…！」

「さて、次はこちらの番だ。せいぜい楽しませてくれよ？」

ファントムがソロモンの杖を掲げると、さつき2人が通り過ぎたカプセルが開き、そこからノイズでもファントムダストでもない生命体が出てきた。

「これは…一体!？」

「何を作ったというの、ファントム!？」

ファントムは蔑むように二人を見、こう言った。

「それはノイズとファントムダストの融合体……ファントムノイズ響動く陽炎」とでも言おうか。」

「融合体——だど!？」

「二つの特徴を持つこいつは、どんな攻撃も位相差障壁によって無効化する!」

ファントムの高笑いを背に、二人はファントムノイズと対峙した。

「本当に攻撃が当たらないのか、試すのが一番だと思うがーどうだ?」

「奇遇ね、私も同じことを考えていたわー一気に放つわよ!!」

二人はミサイル発射の構えをして、

「ちよせえ!」

「くらいなさい!」

一気に放った。それはファントムノイズの周辺に砂埃を上げる。命中したかに見えるがー

「嘘だろ!？」

ファントムノイズはそれをもろともしないと言わんばかりに咆哮を上げると、二人に向かつて炎を纏った噴出物を発射した。二人はうまくかわしたように見えたが、それは地面に当たると直前で爆発し、二人を施設の奥へと吹き飛ばした。

「うあああつ?!」

「ううつ…!!」

2人が何とか立ち上がると、そこには二人を見下ろすフアントムと、その後ろでいつでも噴射できる格好のフアントムノイズがいた。

「そうそう、君たちのことは事前に調べさせてもらったよ、雪音クリス、ヘレナ。」

フアントムが話し始める。

「君たちは今の仲間と戦ったことがあるというじゃないか——なぜそこまでしてきた奴らと行動を共にする?なぜ憎しみあつた者に、無理してまで同調しようとする?君たちが戦うべき相手は我々ではなく、あいつらではないのか?」

二人はしばらく黙っていた。不意にクリスが話し始める。

「確かにアタシとS. O. N. G. のメンバーは争つたこともある——けどよ、あいつらはアタシの間違いを、元に戻してくれたんだ!」

フアントムは黙つたままだつた。ヘレナも話し始める。

「たとえ憎しみあつて一度は刃を交えていても、それはもう過ぎた話であることに変わりはないわ。それに、目的が同じである人と争つても、何の利益もないでしょう?」

フアントムは黙つて聞いていたが、突然高笑いしたかと思うと、

「どこまでも愚かよ…一度戦つた相手と和解など、人類の歴史を見てもそう多くないの

に――」

「それでも、全く達成されていない訳じゃねえ!! あたしはその少数派に賭けたいんだ!!」
「つくづくうるさい奴らだ…お前たちは我が直々に手を下したいところだが、返り討ちに遭ってはたまったものではないからな―」

そう言い残して、ファントムはどこかへ消えた。

「畜生、また逃げられた!」

「それより今は、こつちが優先よ! このデカブツは私たちの手で止めないと―住宅地の方に向かわせては、被害が大きくなるばかりよ!」

二人の目の前で、ファントムノイズが巨大な影を落としていた。二人は施設の奥の方へと隠れて、作戦を立てる。

「あまり時間がないわ。急がないと。」

「とりあえず整理しておく、アイツにはアタシたちの攻撃は効かない、と。これをどう攻略すればいいんだ?」

「さつきは一斉に撃つても効かなかったわよね…」

「ああ、厄介な特性を――」

ここでクリスは、あることに気づく。ファントムノイズの体をよく見ると、ところどころに少しだが傷が見えた。

「——!?おい、アイツの攻略方法、分かったかもしれないぞ!!」

数分後、二人は物陰から出てきた。二人とも、ミサイル発射の構えをしていた。

「まさか、完全に融合しきっていない箇所を狙うなんて…まあ、私の照準に狂いはないけれど。」

「とにかく、撃ちまくってればどこか当たるはずだ! 決れた所に”アレ”をぶち込むぞ!」

二人はファントムノイズを囲うようにして散開して、

「おりやああつ!!」

「この散弾——耐えられるかしら!」

二人はその勢いを止めることなく、ファントムノイズに向けて放つ。しばらくして、ファントムノイズは悶え、苦しんだ。

ヘレナが索敵用スコープでファントムノイズの体全体を見回す。と、彼女はその腹部に、ミサイルの爆撃によって抉られた傷を目にした。

「あつたわ、クリス! あいつの腹を狙えば倒せるかもしれない! チャンスは一度きりだからね、いいかしら?」

「そんなことぐらい、わかってるよ！」

クリスは一度フロントムノイズから離れると、特大ミサイルを発射する準備をした。

数分前

「だけど、ただ闇雲にミサイルを打ちつぱなしじゃ、あれは倒せないと思うのだけど。」
「もちろん、アタシもそう思ってる。だから、アンタのミサイル、ちよつと貸してくれないか？」

「——!? え、ええ…」

言われるがままに、ヘレナは自身の腰部部分についているミサイルを丁寧に取り外した。

「でも、これを一体どうするの？」

「それは出来上がってからののお楽しみだ！最後にこいつをぶち込んでやる！」

「——よし、いつでもいける！」

クリスの準備が整った。彼女の腰からはミサイルの小型発射台のようなものが出て

きており、彼女の胸部辺りには大きめの発射台と、腰に付いたものとは違う、ひときわ目立つミサイルが顔を出していた。

「ヘレナ、そつちはどうだ!?!」

「大丈夫よ、こちらもいつでもいけるわ!」

ヘレナは、施設の天井の方にいた。彼女もまた、ミサイルを発射する準備が整っているようだ。

「よし、行くぞ!」

「ええ!」

合図と共に、ヘレナが大量の小型ミサイルをフロントムノイズの目に向けて放った。相手の視界を塞いだのだ。

「クリス、今よ!」

「おうつ!」

その言葉で、クリスが大量のミサイルを腰から放つ。それによって、フロントムノイズの傷が深く、大きくなった。

「さあ、ショータイムだ! 閻魔様に——よろしくなあ!」

クリスが特大ミサイルを放った。それはまっすぐに傷に向かっていき、フロントムノイズの体が抉れた部分に当たったところで周りを巻き込む大爆発を起こした。

一方、S・O・N・G・ではー

「みなさん、これを！」

緒川が叫ぶ。皆、モニターを見た。

「これは…：廃墟？」

「クリスさんとヘレナさんが向かったビル跡です。どうやら、ここがノイズの発生源だと睨んだようですが…」

その瞬間、ビル跡は音を立てて崩れた。地下で爆発があつたようだ。

「—!? そんな、クリスちゃんっ！」

「響さん、安心してください。まだイチイバルの反応は消失していませんので、クリスさんもヘレナさんも生きていますよ。」

「えっ、そんなんですか？ じゃあ二人ともまだあそこで頑張っているんですね！」

響は嬉しそうに言った。その様子を見ていた未来が、

「じゃあ、私はクリスが帰って来た時のためにごちそうを作ろっかな。友里さん、この間もそうだったけど手伝ってくれますか？」

「ええ、私がやれることならなんだってするわ。」

そう言つて、二人はキッチンの方へ向かった。

「後は、ギルドナ君と切歌君が交戦中、そして…」

「調ちゃん…リイカさん…」

Chapter 8 一信じる正義のために（後編）一

「——サン！調サン！」

調は目を覚ました。リイカが、彼女の顔をまじまじと見つめている。

「健康状態、精神状態に異常ナシ……」

「リイカさん、ここは……？」

「どうやら私たちハ、ファントムによって古代ニ飛ばされテしまったようデス。」

そう言うと、リイカは辺りの土を採り、センサらしきものでスキャンを始めた。

「エルジオン内のデータとこの土の成分ヨリ地質年代を特定……」

しばらくして、リイカが戻ってきた。

「調サン——ドウヤラ私たちハ、メソポタミア文明黎明期に飛ばされテしまったようデス。」

「……ってことは、私たちが今いるのは、ウエル博士と同じ時代ってこと……!？」

だだっ広い土地に、少女の虚しい悲鳴が響いた。

「… 調サン、叫んでいても誰モ助けに来ないト思いマス。」

「とりあえず、ウエル博士を探さなきゃ…彼が力になってくれるかも。」

調とリイカは、目の前に見えた巨大遺跡に向かった。

彼女たちが入口に着くと、二人の門番が待ち構えていた。彼らは彼女たちに向かって、彼女たちの知らない言語で語り掛けてきた。

「日本語に通じる…わけないよね。リイカさん、翻訳できないの?」

「私たちの時代デハ、古代文明はパルシファル王朝デス、ノデ。残念ナガラ、彼らノ言っていることハ私にも分からないデス。」

「そっか…」

2人が途方に暮れていると、突然上から声が出た。彼女たちが上を見ると、そこには白衣を着た男性が立っていた。彼は門番同様よくわからない言葉で門番と話している。と、突然門番が二人に頭を下げ、門の両脇によった。2人がどうすればいいのかその場で立ち往生していると、白衣の男性が言った。

「その二人は通つていい、と言っている!直々に私の友人と言つておいたからねえ!」

2人が門を抜ける時、リイカは不思議そうにぶつぶつ呟いていた。

「ここでは日本語は通じないハズ…どうしてあの男性は日本語を使っていたんでショウカ？」

「ああ、それは——」

「——愛、ですよッ!!」

調が答える前に、さっきの白衣を着た男性が突然話しかけてきた。調には見覚えがあつた。

「ウエル博士…!」

「…何故ソコで愛なのか、理解しかねます、デス。」

「リイカさん、そこはスルーして大丈夫。それよりドクター、協力してほしいことが——」

「それはこっちのセリフですよ! 訳の分からない青いもやに飛ばされて、気が付いたらここ。最初は言語も分からないし、一年半かけてようやく簡単な挨拶ぐらいができるようになり、五年かけてやっとここさ何となく会話ができるようになった——あの野郎、今度会った時はけちよんけちよんにしてやりますよ!」

ウエル博士の愚痴をよそに、調が話した。

「…ウエル博士、私たちと協力して元の時代に帰らないと。」

「ああ、そうでしたねエ！折角君たちと会えたんだ、私もできることをしなければ！」
すると、周りの人の騒ぎが三人の耳に入った。ウエル博士が耳を澄ます。

「彼らはなんて言ってるの？」

「フーム…なるほど、どうやらファントムのお出ましましたんだよ。彼らは『この都市の中心部にある洞窟に青い炎のような動くものが現れた』だそうだ。」

「——!!じゃあ、そこに行けば戻れるかも……！」

「いずれにせよ、それ以外ニ手掛かりガ全くありません、ノデー！」

三人は、その洞窟へと向かうことにした。

「——ここ、だいぶ深いみたい……」

調が呟いた。入り口からだいぶ歩いてきたが、最深部にはまだつかないようだ。辺りに岩が転がっており、時折コウモリの羽音が聞こえる程度で、他には何もなかった。

さらに、この洞窟の中は猛烈に暑かった。調もウエル博士も、洞窟に入って数分もたないうちに滝のような汗を流している。

「調サン、ウエルサン、ここで休めそうデス。」

狭かった洞窟が開け、座れそうな岩も転がっている、三人は一度休憩をとることにした。

「はあ…この洞窟、何でこんな暑いんだろう…」

「あの遺跡の人々たちの話では、この洞窟はもともと涼しかったようだ。彼らの言う『青い炎のようなもの』と関係があるかも——」

その時、突然地鳴りが起こった。三人がとつさに立ち上がると、そこには巨大なファントムダストがーいや、どこかノイズのような気配も帯びた生命体が彼らの目の前に現れた。

「——!?何、これ…」

「私のデータベースにもこのような生物ハ載っておりません、ノデー」

「何だか知らないけど、とにかくやるしかないでしょうよッ！私だつてこの右手がありますからね！」

三人は戦闘態勢に入った。

「——ハア…ハア…」

「おかしいデス…私たちの攻撃が効いていないようです、ノデー」

「いや、よく見ろ、2人とも。」

後ろから声が出た。振り返ると、戦闘態勢に入ったものの早々に離脱して岩陰から様子をうかがっていたウエル博士がいた。珍しくまじめな顔をしている。

「博士…『この右手がありますからね!』って言ってたのに、結局参加しないんだ…」
「それはともかく、デス。私の生体反応センサーによると、どうやらアノ生命体の身体の一部に傷がついているようデス。」

そう言われて、調は目を凝らした。確かに、ところどころに傷がついている。

「じゃあ、このまま戦えばいいかー」

「待て、2人とも!ただ闇雲に攻撃を当てていては駄目なようだ。私が即席で作った成分分析マシンによるとー」

そんなものを即席で作れるのか、すごいなあ、などと感心している場合ではない。調はウエル博士の言葉に耳を傾けた。

「青い部分に打撲のような跡が、それ以外の色の部分に切り傷のような跡があるのさ。」

「——えつと…?」

「ここで、君たちの武器を見てみよう!リイカ君のは打攻撃を得意とするハンマーで、調君は斬攻撃を得意とするヨーヨー…さて、これからいえることは——」

「——!!つまり、私がいろいろな色の部分を狙って、リイカさんは青色の部分を狙えば

!!

ウエル博士は満足したかのような笑顔を見せると、二人の背中を押した。

「さあ、弱点は私のおかげで分かったんだから、あとは君たちに任せよう！」

「まったく…行くよ、リイカさん！」

「脅威判定A。セーフティロック解除。ターミネート・モード起動。いつでも合わせられます、ノデ！」

ウエル博士は再び岩陰に戻っていった。調は他色を、リイカは青色の部分を狙って攻撃を仕掛ける。

「はああーっ！」

「ハイ！エイ！」

しかし、それは倒れる様子がない。次第に、二人の顔に疲れが見えてきた。

「ウエル博士！他に急所とかないの？」

「今調べているところだが、こちらからは体力がバカでかいとしか言えない！一気にはけりをつけた方がよさそうだ！」

「そんなこと言ったって——」

しかし、リイカはそれを聞くと頷いて、

「分かりマシタ。脅威判定ヲSに変更。カタストロフ・モード起動。対象をロック。敵

ヲ殲滅しマス！」

リイカは自身のリミッターを外したようだ。先程とは速さ、打撃の威力が段違いである。唾然とする調に、たまらずウエル博士が叫んだ。

「君にも強化機能はあるんだろう、調君！」

「あるにはあるけど、簡単に起動できるわけじゃ——」

調が言いかけたとき、リイカが叫んだ。

「調サン！避けてくだサイ！」

「えっ——？」

調が反応する間もなく、彼女をビーム粒子が包んだ。瞬間、爆発が起こる。

「調サン——!?!」

「調君！無事か!?!」

心配した2人が駆け寄っていく。その時を待っていたかのように、それは再びビーム粒子の発射準備に入る。

「——!!まずい、あんなのを喰らったらひとたまりもないぞ!?!」

「デモ、調サンが!?!」

煙が立ち上る中、二人は何かとして調べに近づいていこうともがいた。その間にも、彼らの後ろでは着々と発射準備が進められている。

「アノ生命体のエネルギーが、先ほどの最大値二——イエ、それ以上に上がってイマス！」

「何だつて！つまり、さつき以上のビームが飛んでくるといふことか!! まずい、非常にまずいッ！」

2人が煙の中でもがく中、それは大きく振りかぶった。そして——

二人の目の前で金色の光がまばゆく輝いたかと思うと、二人のすぐ背後で調がそのビーム粒子を止めていた。

「調サン!! ソノ姿は一体…?」

「間に合った——アマルガムの発現!」

彼女のギアは金色の輝きを帯び、その手には巨大な盾が握られていた。

「リイカさん、待たせちゃったね。行くよ!」

調はふつと笑った。リイカもツインテールパーツをグルグル回して応答する。

「ハイ! 仕切り直し、デスネ!」

調の盾が変形し、巨大なカッター付きヨーヨーへと変形する。ウエル博士が飛び跳ねた。

「これですよ、私が求めていたものはッ！さあさあ、その調子でささつとやつつけちゃつてください！」

「毎度毎度、調子がいいんだから……」

「調サン、今ならアノ生命体を倒すことも可能デス！」

リイカの声に、調はあの生命体に立ち直った。先程のエネルギー射出の反動だろう、それはその場からほとんど動いていなかった。

「弱つてる……今なら!!」

調とリイカが大きく振りかぶった。調はヨーヨーを高速回転させ、リイカはハンマーの打撃部分に力を込めて――

突然、周りの景色が解けた。岩も、あの生命体も、ウエル博士も消えた。二人は振りかぶった状態で、その場から身動きが取れなくなっていた。

「――!?何、これ？」

「調サン、前方ヨリエネルギー反応を検知。何か接近してきているものと思われマス。」

調が驚いて返答しようとする前に、二人の前に青く揺らめく影が見えた。

「——ファントム!!」

「ほう、私が放ったファントムノイズをもろともしないとは…そうとも、あいつは私が、次元粒子を使って生み出した存在なのだよ。ファントムダストとノイズの融合症例、ファントムノイズだ!」

「次元粒子…?」

「次元粒子とは、物質が時空を超える時に発生する、この世には存在しないはずの物質…少し細工を加えてやると、二つの物質を強制的に融合させる能力を持つのだよ。それはそうと、調、お前はかつての敵に力を貸しているのだぞ…昔の自分が見たらどう思うだろうか? 本当にあの男に手を貸すのは正しい選択なのか? 調、リイカ——お前達の決断があらゆる時代、あらゆる未来を殺すことになるやもしれぬぞ?」

調はうつむいたまま、しばらく黙っている。いつの間にか、地に足をつけて、ヨーヨーも地面に転がっていた。

「調サン…?」

「…私は、ずっと間違ってたんだ…真に刃を向ける敵を…」

ファントムがフツと静かに笑った。調は顔を上げる。その顔は、決意をあらわにしていた。

「私が刃を向けるのは、響さんやウエル博士だと、ずっと思ってた…でも違う！私は、私
が信じる正義を貫く！だから——」

調が大きく振りかぶった。

「私が——私たちが真に倒す敵はあなたたちだよ、フアントム！」

調の刃がフアントムに届いた。フアントムは悶え、たじろいだ。

「愚かな！我が言葉に従っていけばよいものを——いいだろう、お前たちの選択が正し
かったかどうか見届けてやろうではないか。」

そういうと、フアントムは静かに消えていった。途端に元の風景に戻り、フアントム
を貫いていたはずの調のヨーヨーは—フアントムノイズに巨大な傷を負わせていた。

「——!? 一体、何が起こって——」

「いいですよッ！ほら、あの巨体に穴が開いた！あそこを狙えば倒せるはずですよッ！」
ウエル博士が叫んだことで、調ははっと我に返った。見ると、フアントムノイズの胸
部辺りに大きな穴が開き、その中に核のようなものが見えた。

「あれを狙えば——リイカさん！」

「エッ？あつ、ハイ！いつデモいけます、ノデー！」

リイカと調が呼吸を合わせる。ほとんど動けなくなつたその巨体に、二人の合体技が
繰り出される。

「これで——ッ!!」

「終了デス!」

双β式・巨炎^{ホルケーノ・スマッシュ}打——調のヨーヨーに炎を纏わせて回転させ、その炎でリイカのハンマーも包み、巨大な打撃攻撃を生み出す技。調とリイカが織りなす、二人だけの合体技である。

炎に包まれた一撃を核に当たる部分に喰らったファントムノイズは苦しみ、悶えて一消えた。

「やったの…?」

「ファントムノイズの生体反応を解析中——消失ヲ確認。調サン、何とか倒せたヨウデス。」

「やりましたよ、二人ともッ!私の予測が正しければ、これで——」

ウエル博士が言いかけたとき、どこからともなく青い稲妻が現れ、二つの青い穴が現れた。

「これですよッ!そう、私はこれにさらわれたのですよッ!」

「私たちも、この穴を通ってここまで来た。」

「時空の裂け目、デス。流れ込んでくる空気から年代ヲ測定——」

しばらくして、リイカが言った。

「——測定完了。ドウヤラ、右の時空の裂け目の方が年代が古いようデス。」

「つまり、私は右の穴を、君たちは左の穴を通っていく、というわけだな？」

「そういうこと、かな。ここでお別れだね、ウエル博士。」

ウエル博士は少しためらってから、調に質問を投げかけた。

「調、一つ聞きたい。僕は、英雄になれたかい？」

「それは……」

調はどうこたえるか迷った。ウエル博士は確かに世界の崩壊を防いではいるが、その前に悪事をこれでもかと企んでいる。すると、リイカが突然口を挟んだ。

「それハ、自分の目で確かめるのがよいと思いません。自分の行く末をはじめカラ知って
いては面白くないデス、ノデー！」

「リイカ君……」

ウエル博士は、リイカの方をしばらく見つめていた。やがて頷くと、

「……それもそうだ。よし、僕の最期は僕自身で目に焼き付けておこうじゃないかッ！」

三人の後ろで、穴が少し小さくなった。リイカがいち早く感じ取った。

「ハッ!? 調サン、ウエル博士サン、時空の裂け目ガ小さくなっ
ていきマス！」

「これはまずいね。さて、話したいことは山とあるが、一つだけ言おう、調君! 今度会っ

た時は敵同士だからねッ！」

ウエル博士は笑い声を響かせて、穴の向こうへと消えていった。

「さて、と……リイカさん、私たちも戻ろうか。」

「ハイ！そろそろワタシも、外の空気が吸いたくなってきました、ノデー！」

二人は、時空の裂け目を抜けて元の世界へと戻っていった。

Chapter 9 — Lost Alchemy —

ギルドナと切歌は奮戦していた。2人の活躍で、ファントムダストもノイズもだいぶ減ってきていた。

「かなり減ってきてるデスツ！これなら——」

「いいや、まだ安心はできない。どこかにまだ親玉が潜んでいるかもしれないからな。」

「うう…： 隠し玉ってことデスね…： そんなのが来たら——」

まさにその通りだった。瓦礫と化したビルの中から、ファントムともノイズとも言いぬ歪な存在が現れた。

「——!!何デス、こいつはツ!?!」

「こいつを倒せば残りの奴らも撤退するだろう——行くぞ、他のザコはアイツを倒してからだ!!」

「りよ、了解デスツ!!」

二人は一気にその巨体につっ込んでいった。ありったけの力を込めて斬攻撃を畳み掛けるが、それが倒れる気配はない。むしろ、攻撃の反動で2人の体力の消耗の方が激しかった。

「くっ… これじゃあいくら戦っても勝ち目が見えないデスッ!!」

「だが、やつもダメージを受けているのは当然だろう。このまま押し切って——」
 「2人とも、聞こえるか？」

突然、携帯用端末から司令の声が聞こえた。2人は思わず飛び上がった。

「な、何デス急に!?!」

「急いで伝えたいことでもあるんだろう——なるべく早く早く済ませてくれ。」

「ああ、こちらでも手短かに話すつもりだから聞き漏らすなよ。」

その後、司令からあの巨大な奴についての情報を聞いた。奴はファントムダストとノイズが強制的に融合されたものであり、名を「ファントムノイズ」と言うらしい。双方の位相差障壁を持っているため通常は攻撃が聞かないが、体が不完全なため狙う箇所に気をつければ攻撃を当てる事が出来ること、その為に切歌はノイズ部分―赤や緑色の部分を、ギルドナはファントムダスト部分―青色の箇所を狙えばいいことを伝えられた。

「…なるほど、言われてみれば確かにカラフルな体デスね…なんだか綺麗デス!」

「見とれている場合ではない。攻略法がわかったんだ、とつととくたばらせるぞ。」

「は、はいデスッ!!」

今度は2人とも狙う場所に注意して戦った。ファントムノイズの放つビーム粒子は

威力こそ高かったが、動きが鈍く簡単に避けることが可能なため、それほど戦いの支障にならなかつた。

「これで… どうデスツ!!」

切歌の刃がファントムノイズの核を剥き出しにした。ファントムノイズは苦しみ、悶えだした。

「くっ… あそこが急所のようなのだが、あれほど活発になっていては狙いようもないな…」

「そんな悠長なことも言ってられないみたいデスよ…？」

「何ツ…!？」

切歌が見つめる方向をギルドナも見上げると、のたうち回っているファントムノイズの影響で付近のビルが崩れかかっているのが目に入った。なんとそこには、まだ人が残っているではないか。

「まずい——あのまま暴れてもらったらあのビルまで崩壊する… ツ！」

「そうなる前にアイツの核を破壊しないと、デスよ?」

「だが、ヤツには位相差障壁とやらがあるのだろうか? どうやって破壊するんだ?」

切歌は考えた。2人のエネルギーを融合させた技を放てばいいのでは? でも、エネルギーの融合なんてどうやってーと、S・O・N・Gから通信が入った。

「切歌君、戦闘中すまない！ たった今クリス君が帰ってきたー君に伝えておきたいことがあるようだ！」

「全然大丈夫デス！ 早くクリス先輩と繋ぐのデスッ!!」

「そうだな、少し待っている！」

クリスは直ぐに代わった。どうやら、ファントムノイズについて分かったことがあるらしい。

「いいか切歌、アイツの核が剥き出しになってるのは確認できた。どうやらその後処理に困ってるみたいだけど——いいか、あいつの核を破壊するには、2人の技の融合が必要だ——ユニゾンみたいな感じだ。それじゃあ、健闘を祈るぞ！」

そう言っつて、クリスは通信を切った。

「ユニゾン技デスカあ：： あれはよほど親しい人とじゃないと成功しないデスよ：：？」

それを聞いていたのだろう、ギルドナが歩み寄ってきた。

「話は聞いたぞ：： ほとんど成功しないとかな言っていたな。」

「あ、あれは：：」

「アルドは不可能だと思っつていたことを何度もやっつてのけた。アルドに出来て俺たちに出来ない、なんてことは無いだろう？」

「ギルドナさん…」

正直、何も解決されていない。が、切歌は胸につつかえていたものが無くなったような気がした。

「…そうデスよね、迷っていても仕方ないデス!!私とギルドナさんとのユニゾン技…絶対に完成させてやるデスツ!!」

切歌は再び鎌を持ち直した。ギルドナもまた、彼の剣を正面で構えた。

「切歌…タイミングはお前に任せよう。」

「了解デスツ!!」

切歌は注意深くフアントムノイズを目で追った。奴は未だ暴れ回っており、核がこちらを向いてくれる気配はない。

「ぐツ…どうすればこつちを見てくれるデスカ…?」

切歌が悩んでいると、急にフアントムノイズがこちらを向いた。切歌はハツとして、
「ぎ、ギルドナさん、今デスツ!!」

と叫んだ。切歌はギルドナと共に駆け出したものの、あと少しというところでフアントムノイズが核を再び隠すように向きを変え、弾かれてしまった。

地面に倒れるギルドナを見ながら、切歌は落ち込んでいた。

「うう…自分の甘さが失敗を招いたデス…」

その横で大の字に倒れたままのギルドナが、彼女を慰めるようにフツと笑うと、

「なんてことはない。第一、俺達はまだ死んでいないんだから何度だってやり直せばいいものだ。それに、さっきの攻撃のおかげでアイツは倒壊寸前だったビルから離れたみたいだぞ?」

切歌が見ると、確かに、さっきとはかなり距離があった。さらにギルドナが続ける。

「俺とお前はまだそれほど親しくないのは事実だ。…だが、少なくとも俺達には共に戦う理由がある——それだけで、ユニゾン技とやらを成功させるには十分な理由になるんじゃないか?」

切歌はしばらく黙っていたが、やがて顔を上げると、

「そうデス、まだ諦めるには早いデスツ!!ギルドナさん、今度こそアイツを倒すデスよツ!!」

「ああ、今度はしっかりとアイツを見ておいてくれよ。」

キリカは改めてフアントムノイズを凝視した。なおも暴れ回っている。が、切歌は気づいた——奴は常に時計回りで暴れている。これなら、行けるかもしれない——

タイムリングを見計らって、切歌が叫んだ。今度は、寸分の狂いもなく。

「今デス!!ギルドナさん、行くデスよツ!!」

「ああ、今度こそケリをつけてやる!」

切歌とギルドナが武器を思いっきり振り上げた。そして、2人の刃に焔が燃え上がる。

「今だ！合わせるぞ、切歌！」

「はいデス!!これでも——喰らうのデースッ!!」

焔刃・過らMiitee——2人の刃は、巨大な炎の剣となつてファントムノイズを核ごと切り裂いた。核を斬られたファントムノイズは悶え、苦しみ——消えた。

しばらく呆然としていた2人だったが、何かを思い出したように周りを見、胸をなでおろした。

「どうやら、倒壊したビルはこれだけのようだな。」

「被害が最小限に済んで良かったデス！それでは、報告しに帰るデスよッ！」

戦いが終わって疲れているにも関わらずはしゃいでいる切歌を、ギルドナが黙って追いかけていった。

「ほう：：ユニゾン技というのか、面白い。さて：：次は私が行こう。あいつらにファントムノイズの研究をやらせては一向に進む気がしないからな：：さて、これで戦闘データは得られた——あとはこれを元に、ファントムノイズの完全体を生み出すだけ

だ！
ククク…
ハハハハツ…
！
┌

Chapter 10 —まだ負けてなんかいないツ!!

「—ということとは、彼らはソロモンの杖を量産しようと…いや、すでに量産している、と言った方がいいのか？」

クリス、調、切歌とヘレナ、リイカ、ギルドナが戻ってきたことによって、彼らの目的は大まかにつかめてきていた。

「ああ、何でも連中はフアントムノイズとかいうダストとノイズの融合体を作ってたみたいだ。」

「それから、古代メソポタミアの遺産であるソロモンの杖の試作品をもとに作ったって言うってた…。」

「錬金術も応用したらしいデスツ！」

六人が各地で戦っている間に、翼とマリアも戻ってきていた。今はサイラス、エイミと話をしている。

「ほう、巨大化する剣とは何とも面妖な！是非とも手合わせしたいでござる。」

「ああ、いつでも相手になろう。あなたの剣の腕も拝見したいところだし…。」

「それじゃあ、トレーニングルームに行きましようか？ 私たちも久しくギアを纏っていなかったのだし、いい体慣らしにはなると思うわ。」

「ええ、私たちも長らく体を動かしてないからちよつと暇してたのよね。」

「では、そのとれーにんぐるーむとやらに行ってみよう、でござる。」

四人はトレーニングルームへと向かったようだ。その様子を、響、未来、アルド、フィーネが見ていた。

「そういえば、俺たちもあまり体を動かしてないな…。」

「それじゃあ、翼さんたちの訓練が終わったらみんなでトレーニングしようよッ！」

4人が脇で待機しようとトレーニングルームへ向かったその時、

「ノイズ発生！ 場所は… 旧リディアンです！」

突然のサイレンを聞き、響たちは指令室へと急いだ。

「みんな集まったかーよし、それでは簡潔に話そう。旧リディアンの校舎にノイズ反応と、フロントムと思わしき反応が確認された。」

「フロントムも…!?!」

「ああ、だが…すでに前線に出ていた六人は体力の消耗具合から出動の自粛をしても

らうことになった。今回は響君、未来君、翼君、マリア君とそのペアのものに行つてもらう。いいかね？」

「はいッ!!私はいつでも平気です!」

「俺たちもいつでも行けます!」

「よし、では君たち―旧リディアンに現れたノイズの殲滅をお願いします!」

「了解(でござる)ッ!!」

響たちはヘリに乗って旧リディアンへと向かった。リディアンの校舎はルナアタック事変の際に膨大な量の放射線が検出されたことで、現在は関係者以外立ち入り禁止になっている。当然、人影は見えなかった。が―

「あれは何でござるか!?!」

二つの影が見えた。一つは空中に浮いている炎のように揺らめく影。もう一つは、響たちの見てきたファントムダストやノイズとは比べ物にならないほどの大きさの影

だった。

「あれが、報告にあった——」

「——フロントムノイズッ!!」

報告によれば、フロントムノイズはフロントムダストとノイズの体の融合が不完全なため、体がフロントムの部分とノイズの部分に分かれている—なのでアルド達はフロントムダストの部分—赤みがかった青色の部分、装者はノイズの部分—それ以外の色の部分を狙えば位相差障壁の影響を受けることなく攻撃を当てる—ことができるという。無論、響たちは狙うべき場所を狙い、攻撃を仕掛けた。その体の至る所で爆発、土煙が起こる。

「よし、これで相応のダメージは入ったはずだ！」

フロントムノイズはゆっくりと体を持ち上げ

付近にいた未来とフィーネ、サイラスを吹き飛ばした。三人は住宅街の方へ、別々の方向に飛んでいった。

「…どう、なっているんだ!？」

「何か悪い夢でも見てるみたいね…」

「いいや、どうやら現実のようで——ッ!? みんな、伏せて下さいッ!」

響の声にすぐに反応した四人はすぐに屈んだ。彼女らの頭上を、巨大な瓦礫が飛んでいった。おそらく、ファントムノイズが投擲したものでだろう。

何とか全員無事なよう

「——? 4人…?」

ようやく響は気づいた。あの場にいた中でただ一人、エイミだけは響たちの反射神経に一歩間に合わず、瓦礫の海の中で頭から血を流して気絶しているのが見えた。

「そんな——エイミさん!」

と、四人が連絡用に持っていた端末から通信が来た。急いで出ると、司令の焦った声が聞こえてきた。

「みんな、聞こえるか？こちらにも状況は見えている——君たちだけでも退避して、奴らを倒す方策を練るんだ！」

「でも、エイミさんが——」

「彼女のトレーニング風景を見ていたが、君たちが心配するほどヤワじゃない。いずれこつちから現場に赴いて回収する予定だ。」

「…分かりました。私たち四人だけでも、緊急退避します！」

響、クリス、翼の三人は住宅街の方へと駆け出した。ただ一人、アルドを除いて。

「アルド、何をしてるの？ほら、早く逃げないと——」

「いいや、オレは最後まで諦めない！なにより、仲間を見捨てて逃げるなんてこと、オレにはできないんだ!!」

アルドの言葉に、響ははっとした。仲間を置いて逃げる？自分だけが助かって、それでいいのか？そんな思いが先走り、響はこう叫んでいた。

「…そうだよ、まだ負けたって決まった訳じゃない。フィーネちゃんやサイラスさん、エイミさん、それに——」

未来をおいて逃げることなんて、私には出来ない！まだ…まだ負けてなんかいないッ!!」

フアントムノイズへと突進していくアルドと響、それを追う翼とマリア——四人の”追いかけっこ”を見ていたフアントムは、彼らのすぐそばに現れ、呆れたようにこう言い放った。

「まったく、お前達の強さを計っておこうと思ったがこのざまだ——それでも暇つぶし程度にはなったよ、これと遊んでくれてありがとう」

フアントムが手を上げると、フアントムノイズは咆哮を上げた。空気が震え、響たちは耳を抑えてその場でじっとすることしかできなかった。

「フハハハッ!! 強大なものの前に、これほどまで無力になるとは——今度こそ、お前たちを冥途に送つてやるとしようか!」

フアントムノイズが右手を上げた——今度は全員を狙っている。身動きが取れない響たちにフアントムが嘲笑う声が響く中、フアントムノイズが右手を彼らめがけて一点に振り下ろした。

「——う、うう……」

響は目を開けた。立ち上る土煙の中、まだその場で立っている四人の影がおぼろげに見えた。土煙はすぐに消えた。響の目の前に浮かんできたのは、衝撃の光景だった。

響たちがいる場所を中心に、巨大なクレーターが出来上がっている。他の三人を見ている限り、もう立っているのもやつとな状態であるようだ。三人とも、頭から、目から、口から血を流している。程なくして、響の片目も額から流れてきた血で紅く染まった。

ファントムは狂喜していた。さしずめファントムノイズの火力調査と言ったところだろう。

「おお……これが、あいつらがついぞ完成させることのできなかつたファントムノイズ”完全体”の力……！」

「——!!完全体、だと……!!」

「そうとも、この個体はもう完全な融合を果たしている——次元粒子のおかげでな！」

「次元……粒子!!」

4人は、事前に調とリイカが言っていたことを思い出した。

「——そして、その体からはごく少量ですが次元粒子が見つかったんです」

「次元粒子：：？それは一体？」

「次元粒子トハ、この世には存在しナイ未知ノ物質デス。時空に歪みガ発生シタ時に同じく発生するヨウデス。」

「なるほど：：。しかし、なぜ奴らは次元粒子をファントムノイズの体に：：？」

ファントムは話を続ける。

「次元粒子とは、この世には存在しない未知の物質：：。その役目は長年の間不明だったが、我々は次元粒子に『複数の物質を強制的に融合させる性質』があることを突き止めたのだよ：：。」

「!!ということは——」

ファントムは勝ち誇ったように手を掲げた。

「そうとも、このファントムノイズは——」

——完全なる融合体だッ!!」

耳にしたことが、信じられなかった——いや、信じたくなかった。完全なる融合体ということは、こちらの攻撃はファントムダストとノイズ、相互の位相障壁により完全に無効化されている。それだけではない、奴のあの力は、報告にあったファントムノイズとは桁違いのものだ。

「そん…：な…：」

打ちひしがれた四人に向かって、再びその腕が振り下ろされる。今度は、その腕が炎に包まれていた。

「く…：っ、オーガベイン!!」

アルドがアナザーフォースを放つたことで何とかかわせたものの、そこから攻撃に転じるほどの体力も、気力も、響たちにはなかった。

「おのれ、くたばり損ないの分際でちよこまかとー！やつてしまえ、フロントムノイズ!!」

アナザーフォースを発動させたばかりだった彼らはしばらくその反動で動けなかった。そんな四人に、フロントムノイズの炎を纏った腕が、今度こそ狙いを違わず振り下ろされた。

しばらくして、四人はようやく立ち上がった。全員足元はふらつき、さつきよりも出血が激しくなっている。マリアはアバラを抑えてゼーゼー唸っていた。どうやら骨を折ってしまったようだ。

響はどうやら、一番遠くに飛ばされてしまったようだ。他の三人の元へ戻ろうと、響は歩きだした。

「うう… マリア… さん…」

前の方で、腰に手を当てていた影が倒れるのが見えた。

「翼……さん……」

そこからほどなく遠い場所で、翼が倒れた。

「アル……ド……」

巨大な剣を支えにして何とか立っていた彼は、響が到着する直前にオーガベインを片手に倒れた。

「ダメ……まだ……」

み…
く——」

響の意識は、そこで途絶えた。

第三章 反撃、そしてその先へ

Chapter 11 —負けてばかりの私たちじゃない

い—

「—う、うう：？」

響は目を覚ました。またしてもベッドの上、ここ一週間で二度もここに運ばれるとは：：それ以前の平和が嘘のようだ。と、響はようやく気付いた。彼女の顔を、心配そうに見つめる影が一つ——いや、三つ。

「バカ、なんで命令違反なんてしたんだよ!?!おかげでこっちはハラハラしたぞ!!」

「立花、すまなかつたな：：防人としての私の務め、果たすことができずに：：」

「響：：バカ：：ッ」

途端に、未来が響の胸に抱きついてきた。

「小日向、あまり立花の体を揺さぶっては——」

「大丈夫ですよ、先輩。あのバカもこんなんで死ぬほどヤワじゃないって、先輩も知ってるはずだ」

涙でぐしゃぐしゃになった未来の頭を撫でながら、響は優しく話しかけた。

「未来……心配かけてごめんね。ただいま」

目に涙を浮かべつつ、ちよつと笑った未来が返す。

「——おかえり、響」

その後メディカルチェックにより響の体に異常がないことが分かると、四人は指令室へと向かった。何やらエルフナインが話があるとか。

「皆さん、集まっていたいただきありがとうございます。今回皆さんには、ファントムダスト、ノイズ及びファントムノイズ——以降はファントム勢力と呼びますが——に対抗するために、皆さんの武器強化をしたことについて報告します」

「へえ、私が眠ってる間にそんなことをしてんだ…。」

響は胸を撫でた。起きた時にガングニールがなかったのはそのせいだろう。

「——まず、シンフォギア・システムの強化についてです。ボク達は、アルドさんたちに付着していたとある物質に着目しました。その名前は——”エレメンタル”」

シンフォギア装者たちが一瞬ざわめいた。彼らの世界において、エレメンタルとはかつて響たちが戦った一人の錬金術師が使っていた力の結晶のことである。

「エレメンタルとは、アルドさんたちの世界において、四大精霊と呼ばれる強力な精霊の力が宿った結晶のことです。僕が調べたところ、どうやらエレメンタルを身体に纏うことで、ファントム勢力に攻撃が当たるようです。というわけで、皆さんのシンフォギア・システムにエレメンタルを組み込んでみました。つまり、今後は位相差障壁に関係なくファントムダストにもノイズにも対応できる、ということですよ」

「それじゃあ、私達はどうなの？彼女達だけが強化されているなら、私たちはただのお荷

物に過ぎないと思うのだけれど」

ヘレナが口を挟んだ。

「はい、それが二つ目に言いたかったことです。先ほど皆さんの武器を預からせていただいたかと思いますが、その時皆さんの武器にデータチップを埋め込ませてもらいました。そのチップの中にシンフォギア・システムについてのデータが入っていて、これによりファントムダストだけでなくノイズにも皆さんの攻撃が当たるようになります」

「なるほど…拙者らの武器を預けたのは、それでーたちつづとやらを付けるためでございまするか」

最後に、エルフナインはこう締めくくった。

「これで、ファントム勢力とも渡り合うことができます。おそらく、これからが本当の戦い——気を引き締めて臨みましょう！」

「……ここにいたんだ」

響はアルドの後ろ姿を見、呼びかけた。向こうもそれに気が付いたらしく、こちらを振り返った。

「響か、どうしたんだ？」

「ちよつと、前の戦いのことを思い出して……隣、いいかな？」

アルドはベンチの片側に寄った。響はそこに座ると目を閉じた。すぐ目の前で起こっているかのように、前の戦いの記憶が生々しく響の脳裏にこびりついていた。

「あの後、色々考えてたんだ。何で負けたのか——みんなはこっちの攻撃が当たらなかった予想外の敵だからしょうがない、って慰めてくれるんだけど、私はそうは思えなくて——」

「自分のせい、とでも言いたいのか？」

響は軽くうなずいた。アルドが何も言えないうちに響は話を続ける。

「あの時無理してフアントムたちに突っ込んでいかなかったら、あの時司令の命令をちゃんと聞いていたら、私達はこんな風に傷だらけじゃなかったはずなのに——」

「そんなことない」

アルドの声に、響が振り返った。柔らかい笑顔を浮かべながら、アルドが話し始めた。「そんなことないさ、響。あの時突っ込んでいったのは響だけじゃない、オレも一緒だった——だから一人で抱え込んだりしないでいい。あの時の責任を負う義務は、オレにもあるんだ」

響は黙って聞いていた。彼の話が終わると、響は目を閉じた。一人で抱え込んだりしないでいい——アルドの言葉を、心の中で何度も繰り返す。

「……そっか、そうだよね」

響はベンチから立ち上がり、本部へと戻りかけて振り返った。

「肩の荷が下りた気がするよ——話を聞いてくれてありがとう、アルド！」

響の背が見えなくなるまで、アルドは手を振り続けた。少しづつ沈んでいく夕日が、辺りをやわらかい光で包んだ。

「——旧リディアンにフアントムノイズの反応を確認しましたッ!!」

S. O. N. Gオペレーター、緒川の声が響いた。

「いよいよ来たか… 君達、準備はいいかな？」

「はい（デス／でござる）ッ！」

「うむ、いい返事だ。今度こそあの侵略者に一泡吹かせてやるといい」

「ああ、今度こそあの体に風穴開けてやらあッ!!」

「でーたちつぷとやらの力で刀の錆にしてやるでござるよッ！」

アルドは、響の方へと歩み寄った。

「響——次の戦いでは、もう1人で何でもかんでも背負おうとしないでくれよ」

「大丈夫、分かってる。さあ、気合い入れて行こうッ!!」

「お
お
ー
ツ
!!!
」

Chapter 12 — 操るもの、操られるもの —

なんて嘆かわしいことだろう、と響は思った。

彼女は今、旧リディアンの校舎に来ていた。理由は単純明快、この場所で反応を確認した、ファントムノイズを倒すためだ。前回の戦いではこちらに成す術もなくあつけない敗北を喫したが、新たな力を手に入れた今、こちらもそう簡単にやられるわけにはいかない。故にこの戦いは長期戦だ、そうなたらこの思い出の校舎も崩れちゃうんだろうなあ、と響は少し後ろめたい気持ちでいた。

「響、どうしたの？」

未来が話しかけてきた。彼女も、今回の討伐作戦に参加していたのだ。

「ああ、未来。ちよつとね..」

「——？」

「私たちの思い出でもあるこの校舎が崩れるかもしれないと思うと、何だかあまり戦いたくなくなってきた」

「確かに、この戦いで校舎はなくなっちゃうかもしれないけど——」

未来が響の手を取る。その手は、温かった。

「——ここで響と過ごした日々、私は忘れないよ?」

響は未来の手を握り返した。

「そうだよね——えへへ、何だかこんなことでくよくよしてた自分が馬鹿みたい」

「響はいつも通り、その拳でファントムとも手を繋げばいいんだよ。こんな建物一つが崩れるのを気にするなんて、響らしくないもん」

「うん、ありがとう未来!」

と、突然連絡用のイヤホンから司令の声が聞こえてきた。

「みんな、聞こえるか?」

「司令、何でしょう?」

「たった今、ファントムノイズの反応が強く確認された。さらに付近の監視カメラにも、巨大な影が映っていたようだ。間違いない——奴は君たちのすぐそばにいる。準備ができ次第、すぐに突入してくれ」

「ハイ（デス／でござる） ツ!!」

「もう一刻の猶予もないってことデスね…」

切歌が呟いた。

「ええ、けれどこの世界からファントムを一掃できるチャンスでもあるんじゃないかしら」

マリアの答えに、皆の顔が引き締まった。ここで、私たちが倒す。これ以上、民間の犠牲者を出したくはない。

それはアルドたちも同じだった。

「——ここで忌々しい連鎖を断ち斬れば、拙者たちも心残りなく元の世界に帰ることができるでござるな」

「少し寂しい気もするけどね…」

「マダ別れヲ惜しむ時でハないデス！今は一刻モ早く、ファントムノイズを殲滅しなればバなりません、ノデ！」

「リイカの言う通りだ。今は町の人たちに被害が出る前に——」

アルドが言いかけたその時、

辺りに、轟音が響いた。

「な、何だツ!？」

「いよいよということだろう。お前達、後れを取るなよ！」

他の誰かが口を開く前に、ギルドナは剣を構えると、一人で走って行ってしまった。

「あつ、ちよつと!？」

「おいギルドナ、待てて!!」

慌てて他のみんなも追いかける。ほどなくして、ギルドナの姿が見えてきた。一人で呆然としている。

「どういう…ことだ!？」

息を切らしながら、アルドがギルドナに話しかけた。

「やつと追いついた…!!まったく、急に走り出すからオレ達心の準備が——」

そう言いかけて、アルドも目の前の光景に何も言えなくなった。

「2人とも、どうしたの?早く武器を構えないと、ファントムノイズが——」

響が二人の方に歩み寄っていったが、途中でその足を止めてしまった。

三人とも——そして、あとから来た他のメンバーも——目の前の光景に、唾然するしかなかった。

「な——何だよ、これはッ!？」

旧リディアンの校舎は消え、その残骸を踏み潰すかのように巨大なファントムノイズがたたずんでいた。その近くには、勝ち誇ったような顔をしたファントム・ネオの姿も見える。

「……ささない……」

「え? 響、何て——」

「許さない…… 私たちの思い出を踏みにじった、あいつらを——」

「許さないッ!!」

突然響が飛び出していった。その光景に、未来もアルドも驚いた。そして、ファントムノイズとファントム・ネオも気づいたようだ。ゆつくりとこちらを向き、近づいてきた。

「Balwisyall Nescell gungnir tron…」

響が聖詠を唱え、ギアを纏った。彼女に続いて、未来、アルド、翼、ギルドナも続く。

「Reishenshou jingrei zizl…」

「Imyuteus amenohabakiritron…」

走っていく響を、ギルドナと翼が止めた。

「おい、むやみに走って一人で死にたいのか？」

「立花、気持ちは分かるが… 焦れば相手の思うつぼだ。頼む、その激情は抑えてくれ」

ついで、未来も追いついた。

「響… あんまり怒ると、怖いよ。響は優しい響のまままでいて？」

三人に声を掛けられ、響も落ち着いたようだ。

「ごめんみんな… もう一人で行っちゃったりしないから」

「さあ、気を引き締めるんだ！アイツはオレ達のすぐ側にいる！」

アルドの言う通りだった。巨大な影が、五人のいるところに近づいていた。

「フン…一度負けたにもかかわらずもう一度死にに来たのか？」

「そうみすみすやられると思つたら大間違いだぞ、ファントム。今度の俺たちは前とは違うんだからな」

「攻撃が効かないコイツの前では関係ない！さあやつてしまえ、ファントムノイズ!!」

ファントム・ネオの叫びと同時に、ファントムノイズがその右腕を振り上げた。が、それに反応できない響達ではない。軽やかな身のこなしで、その巨腕を避けた。

「はあああ——ツ!!」

「えいッ!!」

ギルドナと未来が、炎の刃と閃光弾でファントムノイズに攻撃を仕掛けた。

「フツ、だからお前たちの攻撃など——」

ファントム・ネオの言葉がそこで詰まった。理由は単純、彼（彼女？）の予想を反する出来事が起こったからである。

フアントムノイズは、その巨体をくの字に曲げて呻いていた。その光景に、響たちも驚いた。

「す、すごい…」

「やっぱりエルフナインちゃんの技術は本物だよツ!! 本当に位相差障壁を無効化できるなんて!」

「馬鹿な…。これは完全体だぞツ!? 貴様らの攻撃など効かないはずだというのにツ!!」

未来は自分のギアを見た。彼女が今纏っているギアは、前のものとは全く異なる形状だった。足を覆うアーマーは紫から白をかたどったものになり、背中にはマントが、そして彼女の持つ杖は白く光り、フィーネをかたどったギアになっていた。そしてフィーネも、今まで着ていた白基調の服ではなく、紫基調の金属パーツのようなものを纏っていた。

「この服と、エルフナインさんが改良してくれた武器があれば、位相差障壁なんて怖くないツ!!」

フィーネと未来が、同時に技を仕掛ける。響が医務室で眠っている間、二人はシミュレータで訓練を重ねていた。ゆえに二人の息は姉妹の如く一致し、技を出すタイミングもばっちりだった。

「はああ——っ!!」

「えいッ!!」

2人の放った光線が交わって一つになり、巨大な槍となつてファントムノイズを貫いた。腹部を抑えて呻くノイズを、さらに翼とサイラスが追撃する。

「はああーッ!!」

「せいや——ッ!!」

炎と水——反する二つのものを帯びた2人の刃が、その巨腕を貫き、その核をあらわにした。

「ば、馬鹿な……貴様らの攻撃が、完全体に届くなど……」

ファントム・ネオは今にも歯ぎしりしそうな目つきで、目の前の敵をにらみつけた。

「認めぬ…… 我は認めぬぞ! やつてしまえ、ファントムノイズ!!」

ファントム・ネオの掛け声とともに、ファントムノイズはその体を起こすと、その場で大きくジャンプした。

たった一度飛び跳ねただけだが、その巨体から起こる爆風の威力は想像に難くない。装者たちは、風に煽られた紙きれの如く、その体を宙に投げ出されてしまった。

「うわあああつ!?!」

「エラー! 天地逆さ状態デス、ノデー!」

それは、アルドたち時の旅人も例外ではなかった。

「フ…ハハ…」

フアントム・ネオは、湧き上がる勝利の喜びを抑えきれないようだった。

「フハハハ! やはり貴様らは、この”完全体”に太刀打ちなどできない! 今回も、我々の勝ち——」

そこまで言って、フアントム・ネオは言葉を詰まらせた。立ち上る砂煙を凝視し、驚きの表情を見せていた。

響とアルドが、立っていた。

「なッ… 馬鹿な!!あの爆風を受けて無事だったものなどこれまで一人としていなかったというのにッ!? — いや、過去に一人だけいたが… あれはもはや人と呼ぶべきものでは——」

フアントムノイズも、驚いた様子でたたずんでいた。信じられないことに、その巨体に震えが走っていた。

「どうした、それでもお前は我々の今までの研究の成果だと言うのかッ!!もう一度、薙ぎ払って——」

しかし、二人の方が早かった。アルドがオーガベインを掲げると、彼を中心に亜空間が現れた。

「これはッ!?まさか——アナザーフォース!?!」

半ばパニック状態に陥っているファントム・ネオに、2人が声をそろえて答えた。

「その”まさか”だよッ!!」

その声と共に、響の拳が光を帯び始めた。それと同時に、アルドの持つオーガベインもかがやきだした。

「これが、オレ達の——」

「これが、私たちの——」

2人の武器が1つになり、巨大な槍を形成していく――。

エ
ッ
!?

「絶唱／絆だ——

瞬間、2人の形成していた巨大な槍は消え、そのままのスピードで2人はファントムノイズの核に向けて武器をかざしていた。

「え、

え
え
え
え
え
え
え
え
え
え
——
ツ
!?

いつの間にかアナザーフォースも解除され、2人は成す術もなく突っ込んでいった。

「う、」

響は目を覚ました。

「うう：：」

「響ッ!!」

そこはまだ、旧リディアンの中だった。どうやら、響はしばらく気絶していたらしい。不意に響は、大事なことを思い出した。

「あつ：： ファントムは!?!」

「そんなに焦らなくてもいいよ、響」

未来が少し笑って指差す先を見ると、そこに巨大な影は見えなかった。ファントム・

ネオが一人、悔しそうにその場にたたずんでいるのが見えた。

「響とアルドが、核の部分に止めを刺してくれたんだよ」

「そうだったのか．．． えへへ、覚えてないや」

その場を包みかけた戦闘中とは思えない和やかな雰囲気、ファントム・ネオが引き裂いた。

「おのれ、貴様らごときに超えられるとは．．． ツ!!次は、さらに耐性をつけた奴を複数体送り込んで——

「うツ!?!」

途端に、ファントム・ネオの動きが止まった。まるで見えない鎖に縛られているかのように、その手足がその場から離れない。響たちが啞然として見守る中、ファントム・ネオはさらに喚いていた。

「ああ、どうかわたくしめをお許してください!!まだ——まだ消えてはならぬのです。あいつらを……我らの計画を幾度も邪魔してきたあいつらを止めるまでは——アアアアツ!!」

瞬間、空に裂け目が現れ、ファントム・ネオはその穴の向こう側へと消えていった。

「あれは……時空の裂け目!?!でも、どうして急に——」

アルドが言いかけたその時、不意にリイカが叫んだ。

「ミナサン、気を付けて下サイ!時空の裂け目の奥カラ先程ヨリ強大な反応ヲ感知!!」

それとほぼ同時に、響たちの持っている連絡用イヤホンから、エルフナインの焦る声
が聞こえてきた。

「みなさん、先程とは違う強い反応を検知しました!警戒してください——何か皆さんたちのもとへ向かっているようです!!」

「エッ!?!それって、どういう——」

響が言いかけたその時、

突然、地響きが起こった。

思わず、響たちはその場でしゃがみこんで耳を抑えた。唸るような地鳴り、吹き飛ばされそうになる装者たち。幸いにも誰かが欠けることはなかった。

「とりあえず、誰か吹き飛ばされた奴は誰もいないみたいだな」

「はあ、それなら良かった——」

エイミが言いかけた、その時。

瞬間だった。気が付くと、響たちは謎の空間に閉じ込められていた。

「——!!なんだ、これは!?!」

装者たちには、その光景に見覚えがあった。

「翼さん、これって…!」

「ああ、立花もうすうすう感づいていると思うが——どうやら私たちは、異空間に取り込まれたようだ」

「なんと、異空間でござるか!して、どうやってここから出られるのござる?」

「この空間を形作っている、本体を叩けばいい。そうすりゃこの空間は消え、元の世界に帰れるって訳だ」

「ええ、そして――」

そいつはどうやら、私たちに向かってきているみたいね」

マリアが言うと同時に、空中に向かって右手のロングソードを打ち付けた。

「おおよ？マリア、そんなところに敵はいないデス――」

が、切歌は途中で口をつぐんだ。彼女の目の前に、巨大な影が現れたからだ。そして

ギルドナはその正体を知っていた。そして、目の前にいる敵は自らの手で倒すべきだ
というこども。

Chapter 13 — 顕現、闇の主 —

響たちの前に現れた巨大な影は、少しずつ実体化し——やがて、その禍々しい姿を彼らの前に見せた。

「何、この巨大な影はッ!?」

「まさか——ファントムの残党かッ!!」

「いいや——」

マリアと調の疑問を遮ったのはギルドナだった。

「いいや、あれはファントムじゃない。ファントムを裏で操っている、奴らよりもはるかに上の存在——闇の主、とでもいうべきか」

「闇の主……」

と、闇の主が突然、地の底から響くような声で笑った。

「ハッハッハ——そうとも、あらゆる世界を混沌へと墮とすために、日々激務を重ねているのだよ」

「……そんな職場、絶対に行きたくはないがな」

ギルドナの声は、抑えきれないほどの殺意を孕んでいた。

「ギルドナ…?」

「大丈夫だ、前にあいつとの間で少しドンパチやっただけだからな——そんなことより、だ。一度負けておいて、何のために俺たちの前に戻ってきた? この世界を混沌で満たすためか?」

「いいや、そんなことはしない。どうもこの世界では、私の邪魔をするものが多すぎる」
言っていることに反し、闇の主は少しうれしそうに話を続けた。

「だから決めたのだよ。闇の傍かたえに仇名す者たちよ——今ここで、お前たちの大切なものを奪ってやろうとな」

「何ツ!? それは、どういう——」

「こういうことだ、魔獣王!」

不意に、闇の主が手を振り上げた。刹那、

「うツ!? ああああ…」

「ぐツ!? うあああツ!!」

突然、シンフォギア装者たちが頭を押さえて座り込んでしまった。

「な…ツ!? いったい何が起こっているでござるか!？」

「解析不能! ドウヤラ、装者の皆サンの頭に何かが流れ込んでいるヨウデス!」

「いったい何をしたっていうの!？」

アルド達の疑問に、笑いながら闇の主が答える。

「記憶さ。この星の、あらゆる世界の生物は、誰もがトラウマを持っている。それを増幅させ、頭に流し込んだだけのことだ。この程度、造作もないのだよ——さて、君たちは少し踊ってもらおう。私は君たちの奮闘ぶりを、この先で見ていることにするよ。ククク……ハハハハ……!!」

地の底から響くような笑い声を残し、闇の主はその姿を消した。

「待てッ!!」

「無駄だ、アルド。何を言おうとあいつは出てこない。それより——」

ギルドナは、装者の方に向き直った。

「まずは、こいつらをどうかしてやらんとな」

と、突然剣を抜く。

「待った！何をしているんだギルドナ!？」

「なんと!!正気でござるかギルドナ殿!？」

「俺はいたって正気だ。それより、お前たちの方こそ気が付かないのか？奴らの殺気に」
言われて、アルドは目の前の装者たちに目を凝らした。と、突然、強烈な瘴気が彼らを襲う。

「うッ……!?これは一体——」

「どうやら、記憶を乱され、正気を失っているようだ。暴走し、敵味方の区別がついていないようだ」

「何だっ!? それじゃあ——」

アルドが言い終わる前に、響たち装者は叫び声を上げながら彼らに飛び掛かっていった。やむなく、アルド達も応戦する。

「ガアアアアツ!!」

「響! くそつ、本当に声が届かないのか!？」

成す術もなく、アルド達は徐々に装者たちに押されていく。

「アルドお兄ちゃん、このままじゃ…!？」

「わかっている! けれど、どうすれば——はッ!？」

一瞬ではあったが、目の前で戦っている響の顔に、ちらりと抵抗と苦痛の色が浮かんだ。

「…!!」

アルドは後ろに大きく飛ぶと、剣を収めた。

「アルド!?! いったい何を——」

「彼らはまだ諦めてないんだ! 元の自分に還ろうと、今も必死でもがいているはずなんだ、だから……」

その言葉が続く前に、響の拳がアルドを吹き飛ばした。

「アルドお兄ちゃん!？」

「…だから、呼びかけ続けてくれ。そうすればきつと、彼女たちは戻ってくる。絶対だ」

しばらく、沈黙が続く。やがて、エイミがぼつりとつぶやいた。

「そうだよね…彼女たちがまだ諦めていないなら、私たちが諦めてどうするのよ! 元の自分への道が分からないなら——」

エイミの拳が、マリアを吹き飛ばす。

「私の拳で、あなたの道を切り拓いてあげる!!」

「拙者も——」

サイラスも後に続く。

「あの凜とした姿の翼殿ともう一度、手合わせをしたいでござるよッ!!」

ギルドナも、リイカも、ヘレナも、戦友たちにそれぞれの言葉をかけていく。

「いつかお前は、俺の剣技をカッコいいと言ってくれた——感謝する。」

「諦めなければ、必ず道ハ開けマス!!」

「聞きなさい、私の声を! そして何より、自分の声を!!」

フィーネも、彼女の戦友、いや、もはやかけがえのない友人となった未来に対して、攻

撃を受けながら必死に想いを伝えていた。

「未来さん、お願い！私の声を聞いて!!あなたが今までどんなものを見、どんな苦しみを味わったかなんて、私には分からないけど——」

フィーネの放ったひとときわ大きな、そして暖かい光が、フィーネと未来を包んだ。

「未来さんは、優しいから。こんなことをしたら、響さんが泣いちゃいますよ?」

「——!!」

そしてアルドは、響の攻撃をもろに受け、ぼろぼろになりながら響に呼びかけ続けた。
「響、オレの声が聞こえるか?オレとお前は、まだ出会ってあまり時間が経ってないし、お互いのこともあまり知らない。けど——」

響の拳をもう一度受け止めると同時に、アルドは彼女の拳を握った。

「この拳は、単に衝動にまみれて誰かを傷つけるものじゃないはずだ。それを一番知っているのは、響だろ?」

「——!!私、は……」

この、拳は…

誰かと手を取り合うための、アームドギアだツ!!」

突然、響の体から光があふれた。その光は空間中を満たし、暴走状態だった装者たちを正気に戻させた。

「うツ!?!私は一切、何を——」

「気にしなくていいってことよ!さ、やっとみんなでもう一度集まれたんだし、あいつを呼びましようか?」

「ああ、そうだな。それにしてもサイラス、その怪我は一切…?」

「それについてはまた今度話すでござる。今は目の前の敵を倒さねば!」

サイラスの言う通りだった。明らかに不満げな顔をした闇の主が、彼らの前に現れた。

「まさか、この者らが過去の出来事乗り越えれるとは——」

「いいや、過去を乗り越えたんじゃない。オレたちの言葉を、彼女らが聞いてくれたただだ」

「フン、つくづく面白くない奴らめ。今度は私が、直々に相手をしてやろう——!」

その言葉と共に、闇の主は背中から何かを取り出した。それを見たクリスが絶句した。

「おい、なんであれがここにあるんだよツ!? あれはもう、ネフィリムの爆発で消えたんじゃなかったのか!」

「そうだよ、確かに私があの時バビロニアの宝物庫に投げ込んだはずなのにツ!」

その疑問に、闇の主が自ら答えた。

「これは、消滅する前のソロモンの杖だ。我らにとつて時空を超えることなど容易いこと。各時代をめぐり、最も我らの望む状態のものを一つここに持ってきたのだ。そして

——」

驚く響たちの前で、さらに驚くべきことが起こった。闇の主が、存在しないはずの二

本目のソロモンの杖を取り出したのだ。

「なツ…!?なんで、二本目がツ!?」

「まさか、また時空を飛び越えて集めてきたでござるかツ!?」

「いいや、これは違う。我らの同胞が、あらゆる時代の知識を取り入れて作ったものだ」
調と切歌には心当たりがあった。

「錬金術と、メソポタミアで作られていた未完成のソロモンの杖——」

「——そして、そこに次元粒子を組み込むことによるソロモンの杖の量産、デスか!?」

「そうとも、そのために我らが同胞は各地で動いていたのだ。全ては、この時の為にな
!!」

闇の主はいつしか、三本目、四本目のソロモンの杖を取り出していた。

「さあ、みるがいい!!この星の終焉を!!貴様らはこの空間で、何もできずに朽ち果てるこ
とになるがな!!ククク…ハハハハハハ…!!」

闇の主がソロモンの杖をすべて掲げる。すると——

「な、何!?急に地震が——」

「イイエ、地震ではないヨウデス!外界にオケル各地で爆発的なエネルギー反応!!イケ
ナイ——この世界がノイズとファントムで満たされマス!!」

リイカがそういつて外界の映像を出した、直後。

各地に、時空の裂け目が広がっていった。それは地球全体を少しずつ包んでいき――

「あ、あれはッ!?!」

そこから、大量のノイズやファントムダストが侵入していた。

「まずいぞ、私たちだけでも対処しきれないあの量を、私たち抜きで対処しろというのかッ!?!」

「そんな、それじゃあもう、私たちの世界は――」

「はあああッ!!」

突然、どこからか謎のビームが飛んできて、ノイズ達を殲滅した。

「なんだと!?! 一体、この世界のどこにあんな力を持つ者が——ッ!?!」

「この世界じゃないさ——」

モニター越しに聞こえるその声に、翼が反応した。

「えッ!?! その声は、まさか——」

「ああ、そのまさかだよ、翼」

直後、モニターから煙の残りが消えていった。そこから現れたのは——この世界では死んだはずの、天羽奏だった。

「奏ッ!!」

「こつちの世界は私と、他の奴らで何とかしておく。翼たちはそつちに集中していきなれ」

「他の奴ら、デスと…?」

「ああ、そうだツ!!」

再び、あのビーム。そして、2人目の影がゆらりと現れた。

「おい、あれは——」

「——サンジェルマンさんツ!!」

そう、かつて響たちと戦ったものの、最後は心が通じ合い、響たちを守るため爆散していった、サンジェルマン達バヴァリア光明結社の錬金術師たち。

「——あたしたちもいるんだゾツ!!」

さらに、オートスコアラータちとキヤロル。

「——私もいますツ!!」

「セレナ!？」

そして、マリアの妹であり、その命を賭してマリアたちを守るために完全聖遺物ネフィリムを封印した、セレナまで——この世界にはもういないはずの仲間たちが。響やアルド達を援護しようと思集まったのだ。

「ク…ツ!! 土壇場で奇跡を起こすとするかツ!？」

「なんだと…?」

それに反応したのはキヤロルだった。

「オレ達が奇跡を起こす、だと? 冗談じゃない——」

俺は奇跡の殺戮者だツ!!」

そして、響の方を見、

「こつちの世界はオレたちが何とかしておく。立花響、お前もそんな奴相手にくたばらんじやないぞ」

「分かつてるよ、キャロルちゃん!!」

響はそういうとモニターから目を離し、闇の主の方を見た。

「——そういうことだから、私たちだつて簡単には負けていられないんだ!!」

周りの仲間たちも、響の後に続く。

「オレたちの世界だけじゃなく、こんなどころに来てまで暴れるなんてな——」

アルドは響の方を見た。その目には、これ以上好き勝手にはさせない、という覚悟がこもっている。

「きつとこれが、最後の戦いだ——響、準備はいいな?」

「うん、いつでも行けるよツ!!」

「よし、それじゃあみんな、ここであいつを倒す!もうこれ以上、俺達の知らない世界が壊れていくのは見ていられないんだ!いくぞツ!!」

Chapter Final —絆の剣と握った拳と、

そして—

「デエエースッ！」

「はああーッ！」

「くたばれッ！」

気合を入れ、ギルドナと切歌、調が闇の主に殴りかかる。その後ろから、ヘレナとクリス、未来が援護射撃を行う。

相手の攻撃を叩き落すのは、翼、サイラス、マリア、エイミが担当だ。

それでも傷ついた仲間は、リイカとフィーネがすぐに回復させる。そして、

「今デス、響さん！」

「いけ、アルド！」

隙のできたところを、響とアルドが叩く。バランスの取れたチームと今までの訓練による連携力の向上、そして皆の間に生まれていた絆により、状況は目に見えて優勢だった。

「せあああッ!!」

アルドの重い一撃が決まり、闇の主がぐらりと揺れる。

「よし、このままみんなで押し切るぞ！」

アルドがそう言った、その時だった。

闇の主の様子が、突然変わった。

「貴様ら……この程度で我らの勝った気でいるなよ——」

そう言って、闇の主が取り出したのは、四本のソロモンの杖だ。

「あいつ、一体何をやる気だス？」

「分からない……切ちゃん、気を付けてね」

そんな二人の会話など全く耳に入っていないかのように、闇の主が四本のソロモンの杖を掲げる。と、後ろから突然声が聞こえた。

「なっ——これは……一体何をした、ファントム？」

キャロルの声だ。リイカの表示したモニターに、異世界からやってきたキャロルの顔が映っていた。隣にはサンジェルマンもいる。

「キャロルちゃん、サンジェルマンさん！ 一体、そつちで何が？」

「急にノイズどもが、どこかへ消えていった」

「ひとまず、こちらの世界から危機は去ったようだ。だがそちらはまだ片付いていないようだな——くれぐれも油断はするな、立花響」

「はい、分かってますッ!!」

「おい、そこで何を話している?」

闇の主の声が、会話を遮った。同時に、地面が揺れる。空気が震える。思わず、マリアとエイミは後ずさりした。

「な…何…?」

「一体何が始まったというの?!」

「新たな生命の誕生だ」

闇の主はゆっくりと、しかしはつきりとした口調でそう言った。

「新たな生命の…誕生!」

「そうだ。わが身とノイズを融合させることで、一つの完全生命体として進化を遂げる。そして我らはこの新たな力を使い、あらゆる時層、あらゆる世界を混沌へと墮とすのだ! ククク…ハハハハ!!」

闇の主の言葉は少しずつ低くなり、姿もだんだんと大きくなっていく。

さらに突然、闇の主の背後から青い光が漏れ出た。

「これは——時空の裂け目!」

「まさか、本当にノイズと融合しようってのかよ!？」

「だから言っただろう——これは新たな生命の誕生であり、混沌への、さらなる一歩だとな!!」

その言葉と同時に、闇の主だったものが腕を地面に叩きつけた。響たちに直撃はしなかったものの、それにより生じた衝撃波が彼らを襲った。

「うわあああつ!!」

「こ、これは……ぐああつ!!」

地面に叩きつけられた響たちの前に、それはゆつくりと姿を現した。かつての闇の主としての姿とは大きくかけ離れ、もう残像のような姿ではなく、ノイズを取り込んだことによりほぼ実体化し、大幅に巨大化していた。あの地の底から響くような声は、はつきりとした声に変わり、その禍々しい姿にはとても似合わない声になっていた。

「あれが——本当に、フアントムなのでござるかツ!？」

「にわかには信じ難いが、奴に変わりにないだろう——もう闇の主とは言えないがな。…混沌なる深淵の響動、とでもいうべきか」

「ほう、カオス・ノイズか…その名前、気に入ったぞ」

「別に気に行つてほしくてつけた名前じゃない。お前が敵だということの再確認をしただけだ」

「フン、なんとも言うがよい。だがギルドナ、どう足掻こうと貴様の未来には必ず闇が憑いている——お前はこちら側に来るのだ！ギルドナ、お前は闇の傍に立つ者なのだ！」

「黙れ。力を求めすぎた成れの果ての分際で、俺を闇に誘い込むだと？まったく——」
ギルドナの刃が、炎を帯び始める。

「——片腹痛い。貴様5とときに屈するような俺ではないということ、存分に思い知らせてやるッ!!」

「ギルドナさん、アタシも合わせるデス!!」

「この際だ、全員で片付けるぞッ!!」

「そうね、私もいい加減、このおぞましい空間から出たくなってきたわ!!」

「よし、全員の呼吸を合わせるんだ！この一撃で、必ずあいつの野望は食い止める!!」

「私も、これ以上私たちの世界を壊させるわけにはいかないッ!!」

「はあああああッ!!」

全員の気合が、想いが、空間を包む。彼らから放たれる光に、カオス・ノイズは思わず目を覆った。

「ぐッ…!?!」

「これが、私たちの――」

時空を超えた、絆の力だあああッ!!」

全員の総攻撃が、カオス・ノイズの体を貫いた。カオス・ノイズの体からは火が噴き、水が迸り、風が吹き荒れ、砂嵐が巻き起こった。溢れんばかりの光がファントムノイズの体を包み、その体がぐんぐん上昇して――

「
—
この
程度
か」

全員が、己の目を、耳を疑った。先程までこの空間に満ち満ちていた光は跡形もなく消え、カオス・ノイズの声が再び響き渡る。

「な——ッ!?確かに、手ごたえはあつたはずなのに——」

「貴様らの攻撃など、痛くも痒くもない。これが全身全霊の一撃などとは、貴様ら闇の傍に仇なす者らも、落ちたものだな」

「く——ッ!!」

耐えきれず、翼は単騎で突撃していった。

「待つでござる、翼殿!」

「まだ、この防人の刃は——朽ち果ててなどいないッ!!」

そんな翼の行動をあざ笑うかのように、カオス・ノイズは右腕を引いた。

「まったく——救いようのない、愚か者めが」

「はあああ——ッ!!」

翼の刃が、一直線にカオス・ノイズの右腕へと吸い込まれていった。それと同時に、カオス・ノイズの右手が撃ち出された。

途端、すさまじい衝撃波が響達を襲う。思わず、彼らはその場でうずくまった。

「ぐ——ッ!!翼さんは!?!」

衝撃波が止み、皆が翼のいた方角に目をやった。が、そこに翼はいなかった。

「なっ——!?!おい、先輩!?!」

「翼さんッ!!聞こえていたら、返事をッ!!」

叫ぶ響たちの後ろで、何かが動く音がした。恐る恐る振り返ると——そこには、血だらけになって倒れている翼の姿があった。

「そんな——翼さんッ?!?!」

「すまない、立花…私の剣では、あやつには、届かなかった…」

「大変デス!!早く回復作業に移りまシヨウ!!」

後ろで未来とフィーネ、リイカが必死に回復作業を行っている間にも、カオス・ノイズとの攻防は続く。とはいっても、響たちはただ逃げることしかできないのだが。

「そんな——このままじゃ、私たち全員がやられちゃう!!」

「だが、一体どうするとうんだ?このまま逃げているばかりでは埒が明かないぞ」

響は、必死に頭を働かせた。一瞬だけでもいい、何かあいつを超えられる方法は——。

「絶唱…」

「何だって、響?」

「私たちがあいつに唯一対抗できる策だよ。もう出し惜しみなんかしてられない!私は

歌う、たとえ、私がどうなってもッ!!」

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l
 E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l
 G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l
 E m u s t o l r o n z e n f i n e e l z i z z l :

「まさか——絶唱ッ!？」

「よせ、バカッ!!お前の体がどうなるか分からないのにッ!!」

「それでも、いい!」

決意を胸に、響は再び歌い出す。

「それでも、いい。たとえ私の体がどうなろうと、私は歌い続ける——今まで私たちを助けてくれたみんなの為に、そして何より、アルド達をもとの世界に返すためにッ!!聞け、私の歌をおお——ッ!!」

その言葉と共に、響のギアがまばゆい光を放ち始めた。

「これは——響殿のしんぷおぎあに、何が起こっているというのでござるかッ!？」

「あれは、絶唱によつてフォニックゲインを引き出し、それに加えて、絶唱を使用した反動による肉体へのダメージを乗り越えた者のみか纏える、最終決戦用ギア。奏には成すことのできなかつた、まさに奇跡の体現——

《バーニング・エクストライブ》だ」

「うおおおおおっ!!」

響の拳と、カオス・ノイズの拳が衝突する。長い衝撃波の末、倒れたのはカオス・ノイズの方だった。

「ぐああ…ッ、まだこんな力が、残っているだど!？」

カオス・ノイズは明らかに動揺していた。その目を見開き、響のことを凝視している。まるで、新たななる生命の誕生を見ているかのように。

「みんな！立花は自らの命をかけて奇跡の体現に成功した——ならば私たちとて、立花に遅れるつもりはないだろうツ!!」

「ああ、今までも毎回あのバカにいいところられてばっかだ——今度はアタシが、カッコいいところみせてやる!!」

「私も行くよ。切ちゃんは、私の後ろに」

「何を言うデス、調!?アタシはいつだって、調の隣で全力全開10000%で頑張ってるのデス！今更後ろに隠れてるなんて、調らしくないデスよ」

「まったく、みんな譲らないわね……でも、私もそうかもね。——狼狽えるな、私」

「私も、やらなくちゃ——ただ響の背中を追うだけじゃない、響と並んで戦うためにもツ!!」

装者全員が、それぞれの決意と共に絶唱を奏でる。たとえギアを纏っていても体が崩壊しかねない苦しみをその身に宿しながら、それでもなお進み続ける装者たちの姿に、アルド達は絶句した。

「これは——」

「彼女たちは皆、これほどの重圧を背負いながら戦っていたというの…?」

「あれが、しんぷおぎあとやらの真の力でござるか!？」

「お兄ちゃん…」

不意に、フィーネが兄のもとへ駆け寄る。

「私たちも、手伝わないと。響さんたちだけに戦わせてちゃ駄目だよ」

「ああ、分かっているさフィーネ。さあ——俺たちも行こう！」

こうして、最後にして最大の戦いが始まる。

カオス・ノイズの強烈な拳の一撃を響たちが受け止める。その後しばらくは再び腕が引きあがることはないため、その隙を見て、全員で相手の体力を削っていく。

が、カオス・ノイズも負けてはいなかった。カオス・ノイズが右手を振り上げると、その背中から現れたノイズが響たちに襲い掛かり、こちらも少しずつ彼らの体力を消耗していった。

個の果ての見えない戦いが、何時間続いただろうか——音を上げたのは、響たちだつ

た。

「アルド!!このままじゃ私たちが先にやられちゃうツ!!」

「分かってる、けれどどうすれば——はツ!?!」

アルドは、自らの腰に提げていた大剣の存在を思い出した。

「そうか——オーガベイン!!」

が、彼の叫びは魔剣に届かない。何度も呼びかけるが、結果は同じだった。

「くそっ……どうしてなんだ、オーガベイン!!この期に及んでまたオレと対立しようつてのか!?!」

「お兄ちゃんツ!!」

その声に、アルドがはっとして上を向いた。そこには、ボロボロになりながらも果敢に立ち向かう妹の姿があった。それにエイミやサイラス、今まで共に戦ってきた仲間の姿が、そこにあつた。

「お兄ちゃん、まだ諦めちゃ駄目だよ!!」

「攻撃は私たちが食い止めるから、その隙にツ!!」

「アルドがこんなことで諦めるような男ではないこと、拙者も十分わかっているでござるからなッ!!」

「アルドサンがここに諦めた時ノ勝率…0.001%。ここで諦めてハ試合終了、デスノデ!!」

「あなたは私たちの時空を守ることを最後まで諦めなかったから今があるのよ。別の時空を見殺しにすることなんて出来ないのじゃないかしら」

「お前がここで死んだら全員ここでおさらばだ。お前と切磋琢磨する時間は、まだ足りていないぞ?」

「みんな…」

アルドは改めて、これまで自分を支えてきてくれた仲間たちに感謝の念を抱いた。そして、これからも支え合うために。

「ああ、オレは最後まであきらめない——オレはこの世界に來た時から、ずっと決めていたんだ!!この世界からファントムの脅威を取り除くまでは、膝をつくことはできないってッ!!」

途端、オーガバインがまばゆい輝きを放った。同時に、剣から声が聞こえる。

——お前の決意は見届けたぞ、アルド。さあ、失われしオーガ族の心火、存分に振るうがいい——

コイツこんないいキャラだっけ、と思ったのも束の間、オーガベインはひとりで柄から抜け、アルドの手の中に納まった。

「よし——行くぞ、みんな!!」

その言葉とともに、アルドが剣を掲げる、すると、アルドを中心に異世界が広がる。《アナザーフォース》だ。

「今のうちにめった切りにするぞス!!」

「こんなところで手加減する情など、拙者らにはないでござるッ!!」

全員が、全力の技を繰り出していく。ユニゾン技に成功したものは、その技も放つて
いる。

「調サン、参りまシヨウ!!」

「はあああーッ!!」

調とリイカが、《》を放つ。

「ギルドナさんッ!!」

「分かっている——くたばれッ!!」

次いで、切歌とギルドナが《》を叩きこんだ。

「アルド、私たちもッ!!」

「ああ、今の俺たちならできる!!心を合わせて、一緒に行こう、響!!」

アルドのオーガベインと響の拳が、さらに強い光を放ち始める。その輝きに、カオス・ノイズも後ずさりをした。

「これは……この光は……ッ」

「うおおおおおおお——ッ!!」

「はああああああ——ッ!!」

ひととき強い光が二人を包む。それは剣でも、拳でもない——新たな道を切り拓く、ガングニール本来の姿である槍へと変わり、カオス・ノイズを貫いた。短い時間ではあっても、特訓やコミュニケーションを重ね、誰よりも絆を深め合った二人だからこそ成せる技——《我流：王牙聖剣突・AF》。

「ぐおおおおあああッ!?!」

遂にカオス・ノイズが膝をついた。体のところどころが形状崩壊し、真っ黒な炭素と

化している。

最早響たちの勝利は確かかと思われたが、カオス・ノイズはまだ倒れなかった。

「まだ——終わらせないッ!!」

そうして振り上げられた拳は、今までの者よりも一撃が重かった。今度ばかりはバーニング・エクストライブ状態の装者たちでも相殺することができず、たまらず後ろに吹っ飛んでいく。

「く——ッ、あいつ、最後の最後でこんな強さを……ッ!!」

「アルド、オーガベインが!!」

「!?!」

見ると、先程までまばゆい光を放っていたはずのオーガベインは、ほとんど光を失いかけている。恐らく、先のユニゾン技でエネルギーをほぼ使い果たしたのだろう。

「まずい——ここでアナザーフォースが解けたら、今度こそオレ達は全員まとめてあの世行きだぞ?!」

「だとしても——」

後ろで、響の声がした。

「だとしても、私はあきらめないッ!!ここまで来るのに、たくさんの方が力を貸してくれた。だから、それに応えなきゃ——私たちの世界を、守るために!!」

「救け出すんだッ!!」

全員の想いと、力と、決意のこもった一撃――

《Another Determine》。

「流れ星、落ちて燃えて尽きて、そして——」

フアントムノイズの体が、ボロボロと零れ落ちていく。

「私たちの世界を、守ってくれた——」

「まだ、だ……」

「またも、全員の予想に反したことが起こった。闇の主が動き出したのだ。」

「まだ、終わらせぬ……我らの目的は未だ遂行されていない……」

「だが、お前はもう間もなく朽ち果てる身だ。そんな体で何ができる?」

「今少し、時間を稼ぐことはできる——ふんッ!!」

カオス・ノイズは最後の力を振り絞り、巨大な時空の裂け目を生み出した。

「こ、これは——!?!」

「おわつ、吸い込まれるでござるぞ!」

「いいか、貴様ら——この闇の主、今は貴様らに敗れた身だ。だが、我は必ず戻り、もう一度この世界を混沌に沈めてやろう。それまでの時間稼ぎはさせてもらう。ククク：ハハハハハ!!」

不敵な笑い後へを最後に、カオス・ノイズは完全に消滅した。

「あいつ、また戻ってくるってどういうことだ?」

「それよりアルド、今はこっちよ!!」

「あ、ああ!——みんな!」

アルドは声を張り上げた。

「大丈夫だ、落ち着いてくれ。時空の裂け目の中に入ったら、仲間を見失わないように、時間の流れに流されて進めばいい。きっと子の裂け目は、オレたちの時代に繋がってるから——」

アルドの言葉はそれまでだった。もう彼の体はほとんど時空の裂け目の中に沈んでいたのだ。

「それじゃあ、向こうで待ってるからな!」

その言葉を最後に、アルドは時空の裂け目へと消えていった。

「よし——わたしたちもいこう。今は何もできないけれど、きっとここに帰ってくる。

そして—

また皆で、ふらわーのお好み焼きを食べに行こう!!」

こうして、響たちは時空の裂け目へと消えていった。まだ見ぬ世界を目指して—。